

〔特集〕

「働・学・研」協同の理念と半世紀の挑戦

—仕事・研究・人生への創造的アプローチ—

十 名 直 喜

名古屋学院大学名誉教授

要 旨

製鉄所および名古屋学院大学において、「働・学・研」協同を掲げ試行錯誤しながら、そのあり方を探求してきた。半世紀にわたり続けてこられたのは、時の利・人の利・地の利のおかげである。学部授業を通しての学生たちとの交流、学部と博士課程との連携、最終授業での融合など、思い出深い。定年退職および本特集を機に、「働・学・研」協同の半世紀をふり返る。自らの3次元体験のみならず、博論指導を通して、社会人研究者の多様な思いや実践モデルにも触れることができた。彼らの自己実現への支援、いわば他者実現を通して、自己実現を追求してきたプロセスでもあった。小論は、これまでの歩みと思いを手がかりにして、「働・学・研」協同の理論とモデルを問い直し深めようとするものである。

キーワード：「働・学・研」協同、働く・学ぶ・研究する、社会人研究者、自己実現、他者実現

Philosophy and half a century challenge of learning and studying while working;

—A creative approach to work, research and life—

Naoki TONA

Professor Emeritus
Nagoya Gakuin University

目 次

- 1 はじめに——退職記念特集に向けて
- 2 「働・学・研」協同の試みとその画期
 - 2.1 「働・学・研」協同の理念とロマン
 - 2.2 「働・学・研」協同の生き方への思いと眼差し
 - 2.3 「働・学・研」活動に踏み出す—20代半ばの提唱
 - 2.4 自分史として前半期を総括—40代末の試み
 - 2.5 「働・学・研」協同の新たな段階—後半期半ばの挑戦
 - 2.6 退職記念号で試みる「働・学・研」協同の総括と新地平
- 3 定年退職を機に振り返る仕事・研究・人生
 - 3.1 最終講義—仕事・研究・教育の総括
 - 3.2 学部授業と産業・企業研究
 - 3.3 定年退職「狂騒曲」
 - 3.4 「思えば遠くへ来たもんだ」—「狂想曲」を経ての感慨
 - 3.5 定年退職（70歳）後の視座と再挑戦
 - 3.6 「働き学ぶロマン」（十名[1997]）の発掘—現代的視点から問い直す
- 4 仕事・研究・人生の意味とダイナミズム—「働・学・研」協同の理論と思想
 - 4.1 働く，労働，仕事とは何か—それぞれの意味と境界域
 - 4.2 学ぶ，研究，創造のダイナミズム
 - 4.3 「働・学・研」協同の理念と主体
- 5 日本における「働・学・研」協同の伝統と創造
 - 5.1 勤勉と学び心の伝統
 - 5.2 戦前日本の児童教育にみる生活と学びの結合—貧困に立ち向かう生活綴方運動—
 - 5.3 「働・学・研」協同の試みとポスト工業社会
 - 5.4 戦後の品質管理活動にみる生産現場の「働きつつ学ぶ」運動—経営主導の光と影
 - 5.5 「ふだん記」（自分史）運動にみる「働・学・研」協同の創意的実践
 - 5.6 基礎研運動と企業社会変革運動にみる「働・学・研」協同の理論と実践
- 6 「働・学・研」協同スタイルの探求—3次元体験をふまえて
 - 6.1 「働・学・研」協同の試みと原型づくり
 - 6.2 製鉄所時代（1971-91年）における「働・学・研」協同の試み
 - 6.3 大学と社会人研究者をつなぐ「働・学・研」協同の試み
 - 6.4 近年の博士課程離れとその背景
- 7 「働・学・研」協同の秘訣と展望—社会人と大学人への示唆
 - 7.1 「働・学・研」協同の極意と社会人研究者への道—社会人へのメッセージ
 - 7.2 社会人研究者育成の心得と醍醐味—大学人へのメッセージ
 - 7.3 「働・学・研」協同の魅力と21世紀モデル
- 8 おわりに

1 はじめに——退職記念特集に向けて

「働く」とは何か。その意味は多岐にわたり、限りなく深いものがある。内容やスタイルが時代とともに変わるも、「働く」ことが人生の基本をなすことに変わりはない。働くことの意味やあり方が改めて問われる、内省の時代を迎えている。「働く」ことは、「学ぶ」ことであり、

さらには「研究する」ことでもある。「働く」、「学ぶ」、「研究する」は、ダイナミックにつながっている。

2020年1月発刊の名古屋学院大学論集（社会科学篇）56-3号は、「十名直喜教授退職祈念号」にさせていただいた。記念号には、退職者の経歴や研究業績一覧などが掲載され、学外関係者も投稿できる。そこで、共通テーマを軸に小

特集を組み、産業システム研究会（博士課程十名ゼミ）にご縁のある方々に投稿をお願いした。

共通テーマ「働・学・研」協同の仕事・研究・人生（仮）をベースに、各位のテーマは自由に設定していただくというものである。

博士論文を仕上げた学位を取得された方だけでなく、挑戦中の方も含まれる。各位の「働・学・研」の思いや実践、学位取得に向けてのドラマ、そうした挑戦が仕事や人生などにどのような影響をもたらしてきたか。そうしたことを、ご自由に書いていただくという企画である。各位の仕事・研究・人生の記念碑として、あるいは今後の羅針盤となることを願っている。

AIやIoTなど制御通信技術の急速な発展に伴い、仕事の種類やスタイルが大きく変化しつつある。品質不正や過労死などの企業不祥事、働き方改革なども重なって、「働く」ことが改めて注目され、根底から問われるに至っている。

そうした時代であるからこそ、「働く」ことを大切に、自らの人生に活かす創意工夫（いわば「学び」や「研究」）も求められる。「働きつつ学び研究する」生き方は、そうした文脈のコアに位置づけることができよう。

その内奥に切り込み、深い知恵と示唆を汲み出そうとの思いを込めたシンポジウム「働きつつ学ぶ」現場研究のダイナミズムと秘訣」を開催したのは、10年前（2009年12月）のことである。

その契機となったのは、名古屋学院大学大学院での発足以来10年間にわたる社会人研究者育成（博士論文指導）の試みである。を通して、製鉄所時代の体験を起点とする「働・学・研」協同の理念とモデルは、鍛えられ深められてきた。そこに光をあてたのが、2009年シンポジウムである。

2009年シンポジウムは、わが「働・学・研」

協同論の画期をなす一步となった。「働きつつ学び研究する」活動を、「働・学・研」協同として捉え直し、その理論化・体系化を図ったものである。

さらに、それから10年が経ち、大きな転機が訪れる。2019年1月の最終講義は、学部授業と博論指導の協同フィナーレの場となる。3月、筆者は（70歳）定年退職となり、大学院での博士論文指導も幕を閉じることになった¹⁾。この10年間、「働・学・研」協同の歩みはどうだったのか。

前後合わせると、20年間にわたり社会人博士の育成に携わってきたことになる。それは、指導教員からみて、あるいは社会人挑戦者にとって、どのような意味をもったのか、どう総括するか。さらに、製鉄所時代の「働・学・研」協同とはどうつながり、何が違うのか。そうした点が、改めて問われている。

製鉄所時代（21年間）の「働・学・研」協同は、自らの「自己実現」をめざすものであった。博論指導の20年間は、社会人博士の育成を通して他者の自己実現をめざすものなる。「他者実現」を支援する活動に昇華したといえるかもしれない。その理念および理論として打ち出したのが、「働・学・研」協同論である。

この2つの時代をつなぐ架け橋となったのが、1990年代半ば（大学教員に転じた直後）の数年間である。製鉄所時代の「働・学・研」協同を体系化し3冊の単著書として出版することで、「自己実現」の試みを有形化する時空間であったといえよう。

小論は、定年退職および本特集を機に、「働・学・研」協同の半世紀をふり返り、社会人研究者の多様な実践モデルをふまえて、「働・学・研」協同の理論と思想を問い直し深めようとするものである。

2 「働・学・研」協同の歩みと転機

2.1 「働・学・研」協同の理念とロマン 人生百年時代の生き方, 働き方, 学び方

人生百年の時代を迎え、長い人生を通してどのように生き、どのように働くのかが、かつなく深く問われてきている。社会・経済・技術などの変化が激しくなるなか、学び続ける必要性もかつてなく高まっている。何のために、どのように学び、働き、生きるのか。

生涯学び働くことが求められるなか、学ぶこと、働くことの意味や性格も、大きく変わりつつあるとみられる。

「働く」とは何か。その意味は多岐にわたり、限りなく深いものがある。内容やスタイルが時代とともに変わるも、「働く」ことが人生の基本をなすことに変わりはない。働くことの意味やあり方が改めて問われる、内省の時代を迎えている。「働く」ことは、「学ぶ」ことであり、さらには「研究する」ことでもある。「働く」、「学ぶ」、「研究する」は、ダイナミックにつながっている。

本書は、「働く」、「学ぶ」、「研究する」とは何か、じっくりと考察する。さらに3つのキーワードを軸に、半世紀にわたる「自ら」の仕事・研究・人生をふり返り、その意味を考え理論的に問い直す。

「働く」「学ぶ」「研究する」のダイナミックなつながりと可能性

「働く」「学ぶ」「研究する」は、働くということに潜在的に備わっているとみられる。「働きつつ学び研究する」ことは、この3つの要素をつなげようと、工夫し努力していくことである。そうした過程の中で、3要素が相互につながるようになり、お互いに良い影響を及ぼし合う。「学ぶ」ことは、仕事のなかだけではない。

仕事を離れても、仕事から得たヒントや問題意識などを手がかりに関係した本や資料などを読みこなし深めていくといった、より深い学びもある。仕事そのものが、研究対象になるのである。そこにテーマを見出し、意識的に追及することが、「研究する」ことであり、原点でもある。「研究する」姿勢や努力は、仕事を見つめ直し職場や産業を捉え直す契機となり、イノベーションにつながる可能性を秘めている。仕事と人生を主体的・創造的に捉え直すロマンを内包している。

「融合」から「協同」へ―「働・学・研」協同として再提示

それを、「働・学・研」融合として捉え直して10年になる。「融合」とは何か、「わかりにくい」との声もあり、あらためて問われている。

『広辞苑』によると、「融合」とは、「とけて1つになること」とある。「働・学・研」融合の「融合」に込めた意味には、本来的な姿として「1つになる」意味も確かに含まれている。しかし現実社会では、その実現に向けての活動がより重要な意味をもつ。

「働・学・研」すなわち「働く」「学ぶ」「研究する」は本来、深くつながっており、相互に助け合い共鳴し合うダイナミックな関係にある。資本主義の下で分離・分化が進行して機能不全が顕在化し、現代社会のニーズに深く応えられなくなっている。その課題に深く応えようとするのが、「働きつつ学び研究する」という活動、ライフスタイルである。「働きつつ」の「つつ」には、「働・学・研」を意識的につなげていこうとする主体の思いと努力が込められている。

働・学・研の3要素がつながり有機的に作用しあうダイナミズムを示す言葉は何か。連携、協働、共同、協同、一体なども探ってみた。

そうした中から浮かび上がってきたのが、「協同」である。「協同」とは、「ともに心と力をあわせて助け合って仕事をする事」(『広辞苑』)であり、「働・学・研」の趣旨にぴったりはまる。「共同」や「連携」という言葉もあるが、「共同」は「2人以上のものが力を合わせる事」、「連携」は「つながって次に及ぶこと」とある。両者には、力を合わせる事、つながることは示されているが、「協同」にはさらに「心」、「ともに助け合って」、「仕事をする事」が加味されている。

「協同」には、働・学・研の3要素が「共同」・「連携」しながら生み出されるダイナミズムが含まれうるとみられる。それゆえ、「働きつつ学び研究する」活動をコンパクトに示す表現としては、「働・学・研」協同がよりふさわしいと考える。そこで、「働・学・研」融合というこれまでの表現を見直し、「働・学・研」協同として再提示する。

「働・学・研」協同は、「働く」「学ぶ」「研究する」を主体的につなげていく活動である。それは、資本主義的な分離から人間的な再結合への道でもある。

なお、「協同」といえば、「産学協同」という言葉が、想起される。1960-70年代に大学と産業界の関係、大学のあり方をめぐって大きな論点となったテーマでもある。「産学協同」とは、「産業界と学校が協同すること」で、大学の研究教育の自由や自主性をどのように確保していくかが問われたのである。近年、「産学連携」という言葉がより多く使われるようになっていく。その背景には、「企業連携」の広がりと同様化があるとみられる。「企業統合」と対置されるが、企業間の多様な協力関係を表す言葉として存在感を増している。「企業連携」の「連携」には、単なる「つながり」にとどまらず「協同」

さらには「統合」に近い領域にまたがる広い意味合いが含まれているとみられる。

本書では、「連携」、「協同」などの本来的な意味をふまえ、「働・学・研」協同として提示する。「働・学・研」協同は、産学協同や産学連携の本来的なあり方、その本質をもより適切に示すものといえる。

2.2 「働・学・研」協同の生き方への思いと眼差し

2018年8月に亡くなられた森岡孝二氏は、わが「働・学・研」協同人生の扉を開いてくれた人で、第2の恩師にあたる。企業社会論の第一人者である彼の人生こそ、「働・学・研」協同そのものであり、比類のない体現者であった。2019年9月21-22日に開催された基礎経済科学研究所の研究大会は、「森岡孝二の描いた未来—私たちはなにを引き継ぐか」がテーマとなった。共通論題において、筆者は「挑戦と思いやりが育んだ森岡企業社会論—到達点と課題」のテーマで発表した。

森岡孝二氏は、第1級の精力的な社会活動家にして第1級の優れた研究者で、両面を兼ね備えて類まれな研究教育者であった。両者のダイナミックな協同を図ってきた人である。社会活動での熱く深い信頼と幅広いネットワークが調査・研究にプラスされ、また研究の成果や洞察力が社会活動にもフィードバックされ、社会活動をリードし押し上げていく。社会活動と研究の良循環が実現していた。

彼の「働・学・研」協同の壮絶な生き方に比べると、わが「働・学・研」協同の人生はあまりにも小さく地味な感がある。しかし、自分なりに全力を尽くした半世紀でもあった。自らの生き方への確かな手応え、とりわけ社会人博士の育成と伴走を通して学んだこと、感じたこと

は、限りなく深いものがある。そうした生き方の起点となり原点となったのが、青壮年時代の生きざまであった。まずはこれまでの「働・学・研」協同の人生を、わが原点からふり返ってみたい。

2.3 「働・学・研」協同の活動に踏み出す—20代半ばの提唱

公害問題の深刻化など高度成長のひずみか顕在化したのは、1960年代後半から70年代初めのことである。大学紛争もたけなわで、それを体験した若者が企業に一斉に就職していった。勤労者の学習運動が、労働組合や革新勢力によって組織され高揚した時期でもあった。社会の法則や変革のあり方について知識人から教えてもらい、組合運動などに結集し活動する。勤労者は、教えるを受ける対象であり、教えられたことを実践する主体とみなされていたとみられる。大学への進学率が高まり企業に就職する大学卒が急激に増えるなか、変革主体としてのインテリゲンチア論も出てくる。しかし、彼らが企業などでどのような知的活動と役割を担っていくのかについて議論されることは、きわめて少なかったとみられる。

こうした社会状況に、物足りなさを感じていたのは、筆者だけではあるまい。民間大企業のなかであって、どのように働き、どのように成長していくのか。その理論もモデルも見当たらなかったのである。

随筆「働きつつ学び研究することの意義と展望」が、わが最初の論文とともに学術誌に掲載されたのは、1973年11月のことである。「自分の生活と労働を深く捉え、それを変革の展望のうちにつかみ直さないと、巨大な流れの中に、ただ押し流されてしまうのではないか」。そのような危機感をバネに、次のような課題を提示

した²⁾。

「積極的に理論化をはかりながら、政策形成能力を各分野で培っていくこと…労働者の中に研究者・書き手・講師を育成し、諸産業分野の労働者が自らの手でもって、内在する諸問題を解明し、政策化し、積極的に組織化していく」。

労働者みずからが、「研究する」ことによって、「内在する諸問題を解明し、政策化し、積極的に組織化していく」ことの歴史的な意義と必要性を訴え、そのモデルとして最初の論文を位置づけたものである。鉄鋼メーカーに入社して3年目、25歳の若造が公示した決意表明でもあった。

「働きつつ学び研究する」という標語は、その後40数年にわたり、自らの働き方、生き方、研究スタイルの羅針盤となり灯台となってきた。「働きつつ学び研究する」は、『資本論』第1巻第13章の「労働は生命のランプに火を注ぎ、思考はそれに火を点ずる」(ジョン・ベラズ)から閃いたものである。

その後の40数年間の歩みは、「働きつつ学び研究する」ことを実践し検証するプロセスでもあった。何度も壁に跳ね返されながらの「七転び八起き」の挑戦であったといえる。「働きつつ学び研究する」活動を「働・学・研」融合と命名したのは、2009年のことである。さらに、本特集では「融合」を「協同」として捉え直している。

そうした「働・学・研」協同の研究スタイルは、日本の財界リーダーであった鉄鋼業とくに大手高炉メーカーにおいて労務管理の枠組みを踏み越えていたとみられ、厳しい処遇を余儀なくされる。そうした悩みは、研究や生き方などの悩みへと波及する。何とかギリギリで凌ぎつつ、鉄鋼産業をモデルとする実証研究により深めていった。

製鉄所勤務21年を経て1992年に、神戸製鋼所を退職し、名古屋学院大学に転じる。そして、27年間の大学勤務を経て、2019年3月末に定年退職を迎えた。大学では、「働きつつ学び研究する」活動をどのように継承・発展させたのか。それをふまえて、この半世紀の活動をどのように総括するかが問われている。

2.4 自分史として前半期を総括—40代末の試み

幻の拙稿「働き学ぶロマン」との思いがけない再会

退職に伴い研究室と自宅の書庫を大整理していた際、埋もれた資料類の中から、拙稿「働き学ぶロマン」を見つける。約8万字強（90ページ：30字×40行／ページ）で、1997年の「自分史文学賞」に応募するも、あえなく落選となった作品である³⁾。

長らくわからず、幻と化していた拙稿（自分史）と22年ぶりに再開したのである。

当時のワープロで編集したもので、そのファイルは残っておらず、残っていても使えない。印刷した原紙も、日光で変色し、ほとんど読めない。今や資料として使えるのは、コピーした分のみである。少し茶色じみているが、十分に読める。22年前のわが分身との思いがけない再会に、心躍る気持ちが抑えきれない。

40代末に、四半世紀にわたる仕事・研究史を、自分史としてまとめていたのである。しかも、定年退職直前にそれを発掘し、再会に至る。そのいずれも奇跡のように映るが、じっくり振り返れば、必然のようにも感じられる。

自分史文学賞（1997年）への挑戦

30代から40代初めにかけては、論文や随筆で3回応募し、いずれも一定の評価をいただいた⁴⁾。1990年の「ま・な・び・す・と大賞」入

賞作品は、「企業社会に生きる「二足のわらじ」論」（十名 [1993]『日本型フレキシビリティの構造』補論）へとつながる。さらに数年の時空を経て、「働き学ぶロマン」へ発展したといえる。

鉄鋼3部作出版の余韻が冷めやらぬなか書き上げ、応募したものである。

その意気込みと期待もむなしく、落選となる。そのショックもあって、作品はどこかに放り込んでしまっていた。その後、折々に思い出しては探してみるも見当たらず、あきらめていた。それが、定年が近づき、研究室と自宅の書庫を整理するなかで、研究室の片隅から、さらには自宅書庫の奥深くから、ひょいと出てきたのである。

「働き学ぶロマン」の構成と趣旨

『働き学ぶロマン—製鉄の熱き炎に交わりてわが研究は燃えて悔いなし』は、仕事と研究の歩みを自分史としてまとめたものである。

その構成は下記のようになっている。

<目次>

プロローグ—「働き学ぶ」わが研究ロマンを生き直す

- 1 製鉄所での現場実習と見習い—鉄鋼マンへの通過儀式
- 2 鉄鋼産業研究への若き情熱—熱き研究ロマンの芽生え
- 3 「仕事と研究」をめぐる葛藤—両立の悩みと試行錯誤
 - (1) 仕事と研究の結合
 - (2) 「仕事と研究」の壁とスランプ
 - (3) スランプ克服に向けて奮闘
 - (4) 30代半ば以降の一進一退
- 4 社会人大学院でのリフレッシュ—知的エネルギーと研究ロマンの高揚

- (1) はじめに
- (2) 社会人大学院に入学
- (3) 鉄鋼マンの社会人大学院生活
- 5 鉄鋼マン生活のフィナーレ
 - (1) 「働きつつ学ぶ」鉄鋼マン生活の醍醐味と無念
 - (2) 鉄鋼マン生活の最終年度
- 6 新天地に生きる—研究ロマンの実現に取り組む
 - (1) 2つの世界（製鉄所と大学）を比較
 - (2) 研究ロマンの実現に取り組むエピローグ—新たな研究ロマンへの旅立ち

下記の小文は、「800字程度の梗概」として付されていた趣旨書である。

「20代前半から40代前半にかけての、人生で最も多感かつ精力的な時代を、製鉄所の生産部門で過ごした。1971年に大学を卒業して神戸製鋼所に入社し、加古川製鉄所に配属される。新鋭製鉄所として、ちょうど稼働し始めた時期でもあった。爾来、1992年に退職するまでの21年間、製鉄所の製鉄部門で原料管理の仕事に携わる。

これは事務系の大学卒鉄鋼マンとしては、異例のキャリア・ライフであった。そのきっかけは、働きながら日本鉄鋼業の現状と未来に関心を持ち、雑誌などで論文を公表したことにあっただけで、自分の個性を活かして仕事をしながら学習してゆこうとする努力に対して、それは大きな壁であった。

そこでの苦しみと、それでも自分の信念を生かそうとする理想とのギャップは、あまりにも大きい。この苦しみの中で考えたこと、それは、自分の仕事や産業そのものを理論化して知的な資産としてつくり上げるとはどういうことなの

かを、人生を賭けて考えることでもあった。さらに、製鉄所での技術や人との出会い、交流を通して芽生えた「働きつつ学ぶ」わか研究ロマンを、温め、育み、深めていく契機ともなる。

「仕事と研究」の両面で大きな壁にぶつかり、苦闘するなかで、心身のスランプに陥ったのは、30代の初めの頃である。そのどん底の中で、森田正馬理論に出会う。改めて、自らの生き方や考え方を深く見つめ直す。それにもかかわらず、「仕事と研究」での現実の壁は、歳とともに一層の重みを増して迫ってきた。

30代末に大きな変化が起こる。京都大学大学院経済学研究科に新設されたばかりの社会人大学院に入学する。それが契機になって、それまでの10年近くに及ぶ壁との闘いから、壁を乗り越える手がかりが見えてくる。仕事をフルにこなしながらの大学院生活ではあったが、大学院制度に支えられて研究ロマンを膨らまし、その実現に向けて歩み始める。

それまでのペンネームから実名入りの研究成果が公表されるようになり、研究者として認められはじめて、漸く企業の態度も変わってくる。5年間の大学院生活が修了するとともに、大学への転出も認められる。

大学に転じて1年後に、初めての単著書を出版した。それが博士論文として認定され、博士（経済学）の学位を取得する。そして1996年には、念願の日本鉄鋼産業論を2冊の単著書にまとめ出版した。やっと研究ロマンを目に見える形で残すことになり、1つの大きな坂を乗り越えた。

これは、勇み足、研究ロマンと企業の現実、苦しみとスランプとの格闘を通して芽生えた、いわば中年の自分史である。」

研究への執念と会社との葛藤—文学賞落選の背景

一読すると、20代から40代半ばにかけての出来事や歩みが時系列に沿ってビビッドに描かれている。いま書こうとしても、当時のことは年々歳々薄れゆくなか、これほど臨場感を持って詳しく書くことは難しい。その点では、次作に向けての貴重な資料になると感じている。追い風になるかもしれない。

それでは、なぜ落選したのか。作品を再読して、その謎がわかるような気がする。読み物としての文学作品に洗練化しきれていないのである。時系列的な叙述に終始していて、後半部分になると単調な運びも目立つ。ドラマ的な表現もみられず、淡々と描かれている。文学的な工夫や洗練化も不十分で、興味をそそる物語になっていないのである。質的には、人生そのものの起伏や深みが足りなかったのかもしれない。

22年前に、小論を読んでいただいた大学人のコメントがあった。「なぜ、それほど研究にこだわったのかがわからない」と。根幹に触れるところへの問いかけである。

その問いに懸命に答えているはずなのに、うまく伝わっていないのである。評価されなかった一因かもしれない。

一介の文系サラリーマンが、会社の仕事でもない「研究」に、なぜそれほどこだわったのか。それは、企業のなかで働きつつ学び研究することが、わが人生のアイデンティティになっていたからである。そして、研究をあきらめることは、自らの生きる意味と価値を失うことにつながりかねないと感じていたからである。

「働き学ぶロマン」には、製鉄所に働きながら研究へと突き進む動機とプロセスが描かれている。

「このままでは自分が見えなくなってしまう

う」、「巨大な流れに押し流されてしまうのではないか」、「自分の生活と労働を深く捉え、それを変革の展望のうちにつかみ直したい」といった不安と欲求が交差する。そして、不安定な操業に振り回され、原料計画の見直しがエンドレスに続く仕事のむなしさを痛感する。

ところが、研究論文では、自分1人で勝負ができるし、渾身の力をふりしぼってまとめると、それが活字になり後にも残る。しかも最初の論文が、思わぬ反響を呼び、高い評価と注目を浴びる。その手応えが、その後の「働きつつ学び研究する」活動を続けるエネルギーとなり、支えの原点になっていく。

逆風下での研究と生きがい探求

どんなにつらくても、鉄鋼メーカーにいるからこそ、生きた情報に接し多様な体験ができるし、それが研究の源にもなる。それゆえ、鉄鋼メーカーを辞めることは、研究を放棄することにつながりかねない。そのような思いが、会社に踏みとどまらせ、執念の如く研究を続けさせていたといえる。

企業社会の中で、「働・学・研」協同の生きざまが企業からにらまれ、キャリア形成の道を閉ざされていく。処遇と研究の壁に阻まれて、もがけばもがくほど、袋小路に陥っていく。その袋小路から脱出する方策を、ひたすら探し求めていた。それはまさに、生きがい、働きがいの探求であった。自分の生きがい、働きがいの核にあったのが、「研究」である。研究を放棄することは、生きがいの放棄（文化的な自殺）を意味する。会社、研究のずれもやめるわけにはいかない。何とか持ちこたえながら、活路を模索していた。そうしたもがき、あがきが、作品には描ききれていないのである。

どんな人でも、何かにこだわりを持つ。そのこだわり方が、サラリーマン的でなく、研究者

的であったといえよう。そのかわりは、多感な青年期に育まれた。1960年代後半から70年代における日本社会の激動、変革の息吹を反映しているといえるといえよう。さらに、80年代から90年代にかけての構造的変動期を駆け抜けた壮年期に、かわりはより強固なものになっていく。

2.5 「働・学・研」協同の新たな段階—後半期半ばの挑戦

「自己実現」から「他者実現」へ

十名[1997]「働き学ぶロマン」は、仕事と研究の両立を図りながら「自己実現」⁵⁾をめざした四半世紀の歩みをふり返ったものである。いわば「働・学・研」協同の前半期版にあたる。

ほとんど時を同じくして、名古屋学院大学では社会人大学院経済経営研究科(修士課程)が1997年に開設され、続いて1999年に(経営政策専攻)後期博士課程もスタートした。当初から、文科省のお墨付きのマル合教授として、社会人の博士論文指導に携われたのは幸運なことであった。伝統のある大学院では、社会人出身者が博士論文指導を担当することは難しかったと推察される。

こうして、「働・学・研」協同の試みは新たな段階に入るのである。自らの自己実現探究にとどまらず、社会人研究者(博士)の育成を通して他者の自己実現すなわち「他者実現」を支援するという新たな課題が加わったのである。

なお、「他者実現」は、筆者の造語である。一般的には使われていないとみられる。社会人の博士論文作成・学位取得さらに社会での活躍を「他者の自己実現」とみなし、「他者実現」と名づけたものである。

マズローは自己実現の先に社会貢献を見ているが、ユングは他者や社会への支援・貢献(い

わば利他)も含んで自己実現の道と考えていたとみられる⁶⁾。ユングによれば、他者も自己の一部である。「情けは人の為ならず」という日本語のことわざもある。他者に情けをかけることは、いずれ巡り巡って自分に返ってくるという循環の思想が、そこに息づいている。

「利他実現」という表現も考えられるが、広義には「自己実現」に含まれるという見方もできる。一方、「利己」と「利他」、「自己」と「他者」は対義語とみられる。そうした点を鑑み、「他者実現」と命名したものである。

「他者実現」を通して「自己実現」を追求するという生き方は、社会人の博論指導において、筆者が心がけてきたものでもある。彼らの挑戦や創造性に深く学び、自らの研究にも長い目で活かしていこうというスタンスは、ユングの考え方や日本の循環思想にもつながっている。そのことに、あらためて気づいた次第である。

自分史から現代産業論への昇華

「働きつつ学び研究する」こと、すなわち「働・学・研」協同の探求は、自らの働く職場・企業・産業と向き合うことになる。仕事の過程や組織の目的の全体像を把握し、仕事の位置と意味を理解して、全体を思慮できるようにすることにつながる。それは、本来の仕事や企業、産業のあり方の探求とも深く関わっている。それはまさに、「良い仕事」⁶⁾の核心をなすものでもある。「良い仕事」を構成する条件は、職場の状況や仕事の内容などによって大きく左右されるが、仕事の担い手自身によって見出しうる、つくり出しうるものでもある。それゆえ、仕事への姿勢がより重要な意味をもつとみられる。

「働・学・研」協同は、本来の仕事や企業、産業のあり方、「良い仕事」の探求とも深く関わっている。わが半世紀近い歩みは、「働・学・研」協同を掲げ、その実現をめざしたものと

える。

「働・学・研」協同論を論文として公刊したのは、2010年のことである。さらに、それを理論化して、5冊目の本（[2012]『ひと・まち・ものづくりの経済学』）の第3部第10-11章に織り込んだ⁷⁾。

そして、人々の働き方や生きざま、そこで培われたノウハウなどは、産業の文化的(社会的)側面として位置づけ、産業の機能的(技術的)側面と対置して捉えた。それをより体系化したのが、6冊目の本（[2017]『現代産業論』）である⁸⁾。

わが「働・学・研」協同論は、「自分史」でもある。その自分史は、この半世紀の社会・経済の世相の移り変わり、とくに1970~90年代の鉄鋼メーカー、21世紀の大学が置かれた状況を反映している。その中から紡ぎ出されたのが、独自の鉄鋼産業論であり、ものづくり経済学の創造、現代産業論の体系化である。

そういう視点から見ると、「働・学・研」協同論は、自分史であるとともに、自分史を越えている側面もはらんでいる。別の言い方をすれば、「働・学・研」協同論という「自分史」を、現代産業論の文化的側面として理論化し、捉え直したのである。それは、自分史から現代産業論への昇華、とみることができよう。

社会人研究者育成の「働・学・研」協同モデルを提示—2009年シンポジウム

2009年12月に開催されたシンポジウム「“働きつつ学ぶ”現場研究のダイナミズムと秘訣」は、名古屋学院大学大学院（経済経営研究科）後期博士課程の開設10周年を記念して開いたものである。

働く現場で生まれ培われた問題意識やノウハウなど巨大な暗黙知の鉱脈は、働く人たちの知的資産でもある。それを掘り起こし、創造的な

研究へとまとめることは、現場に生きる人たちの知的生き甲斐、ライフワークとなるものである。まさに、“働きつつ学び研究する”醍醐味がそこにあるといえよう。それらに果敢に挑戦し、独創的で体系的な博士論文に仕上げた人たち、あるいは佳境に入った人たちがいた。

後期博士課程では、開設以来の10年間（1999~2009年）に12名の博士（経営学）を送り出した。その内の3名に加えて最終審査をパスされたばかりの1人、また博士論文を仕上げ中の3名にパネリストとしてご参加いただき、さらに基礎研など在野にて独自のスタイルで活躍されている3名をお招きした。いずれも、“働きつつ学ぶ”現場研究を自ら創意的・精力的に実践してこられた方々である。

シンポジウムは、基調報告（筆者）とそれを受けて各体験モデルを語る3部構成（第1部「創造的な人生と仕事の新天地—博士号を超えて—」、第2部「仕事と博士論文への創造的挑戦」、第3部「在野に息づく“働・学・研”融合モデルの創造」）からなる。各パネリストには、“働きつつ学ぶ”現場研究のダイナミズムと秘訣をそれぞれの思いを込めて語っていただき（各15分）、フロアからの忌憚ない意見や質問に応えるなど、率直かつ多様で深い交流を図ろうというものである。硬いテーマゆえ30名も集まれば御の字かもという予想をはるかに上回る60名近い参加者を得て、4時間に及ぶも、多くの方が最後まで耳を傾けておられたのが印象に残る。中日新聞の取材もあり、翌日の同紙朝刊にシンポジウムの状況が掲載された。

このようなテーマに正面から取り組むシンポジウムは、日本でも先駆をなす画期的なものといえる。上記11人の「働・学・研」協同の実体験と奥義をコンパクトにまとめた冊子は、70数ページに及ぶ。参加者に配布（マスコミ関係

者には事前配布)したが、そこに溢れる思いの深さ、創造的な生き方と努力には、圧倒されるものがある。この冊子は、後に『経済科学通信』で特集として2回にわたり掲載された¹⁰⁾。

「働・学・研」協同シンポジウムが持った意味

2009年のシンポジウムが持った意味は何か。それは、「働きつつ学び研究する」活動に社会科学の光をあてたことである。「働・学・研」協同として捉え直し、その意味は何かを理論的に整理する、大きなきっかけになったことである。それを検証するために、3次元の視点から自らの歩みを歴史的に総括する。さらに、産業システム研究会（十名ゼミ）や基礎研に集う社会人研究者に「働・学・研」協同体験を語っていただき、検証したことである。

そこで提示した「働・学・研」協同論は、その後10年間において基本的な視点となり、産業の文化的側面として位置づけるなど、現代産業論における重要な一翼をなすに至っている。**歴史的背景—研究・教育の転機としての2008-9年**

2009年に、なぜこのような試みをしたのか、できたのか。その契機になったのが、十名[2008.4]『現代産業に生きる技—「型」と創造のダイナミズム』勁草書房の出版である。学部講義科目名を（「工業経済論」→「現代産業論」へ、（「技術論」→「ものづくり経済論」へと変えたのも、2008年のことである。

1990年代までの鉄鋼産業を軸とするグローバル大企業研究から陶磁器産業をはじめ地場産業・中小企業研究へとシフトして10年、ようやく理論化・体系化に至ったのが、十名[2008.4]である。地場産業・中小企業研究の拡がり、産業研究の理論化・体系化に踏み出すに至る。そうした研究の手応えをバックにして、これまでの研究活動のあり方を文化的に捉え直しまとめ

たのが、「働・学・研」協同論であり、2009年シンポジウムであった。

社会人博士育成（博論指導）の20年は、（彼らの自己実現いわば）「他者実現」へと力点をシフトした時空間であった。その中間点にあたる2009年シンポジウムは、「働・学・研」協同の意義を自覚し、その理論と政策に踏み出すスプリングボードとなったのである。

後半10年の歩みとトライ

その後10年を経て、何がどう変わったのか。定年退職を迎えた今、見える視野や心象風景は何か。

「他者実現」のより意識的な追求は、自らの「自己実現」ともいえる産業研究に弾みをつける力にもなった。ものづくり経済学、現代産業論として体系化し、2冊の本にまとめる。さらに、日本的経営、労使関係論として7冊目の本に集大成し、定年直前に出版する。

この間、「働・学・研」協同論は、バックグラウンドミュージックの如く静かに響いていた。十名[2012.4]の第3部（「働・学・研」融合とひとづくり—労働と人生の文化的創造）は、シンポジウムでの「働・学・研」協同論を産業論として編集したものである。また十名[2017.11]では、等身大の産業・地域づくりとして理論的に整理し織り込んだ。

十名編[2015]の後、「働・学・研」協同論をベースにした本づくりを構想し、進めようとしたが、頓挫する。むしろ、6、7冊目の出版を先行させたのである。それらは、現代産業論における機能的アプローチと文化的アプローチのうち、機能的アプローチの面に主として応えたものと見ることができる。

これまで、正面から取り組めなかった課題、すなわち「働・学・研」協同論をベースとする本づくりが、今や定年後の研究人生を切り拓く

テーマとして提示されている。

「働・学・研」協同と産業・地域づくり

2016年の春季研究交流集会在、「働・学・研」協同型の持続可能な産業・地域づくり」のテーマで、3月12-13日に名古屋学院大学さかえサテライトで開催された。

「働きつつ学ぶ」は、基礎研の理念あるいは道標として半世紀近くにわたり基礎研を支え、それを体現する多彩な研究者や創造的な共同研究を育んできた。「働・学・研」協同は、その思いと歩みを明示化した「働きつつ学び研究する」活動のコンパクトな表現である。そのキーワードを、春集会のキーコンセプトとして捉え直し、産業・地域の21世紀的課題と結びつけ、「働・学・研」協同による持続可能な循環型社会づくりを展望する。それを具体化したのが、2つの共通セッションである¹¹⁾。

共通セッション1は、「働・学・研」融合の理念と実践」である。基礎研に集い研究を続け社会人大学院などでも磨きをかけてきた社会人をはじめ、彼らと学び合い研究を発展させてきた大学人も含めて、半世紀に及ぶ協働の試みと思いについて語り合い深める。このようなテーマを共通セッションの軸とすることは、学会としても稀なこととみられる。当初、心配する空気も感じられたが、むしろ基礎研にふさわしい挑戦と考える。多様な実践に光をあて、理論的な新地平を切り拓こうというものである。

2.6 退職記念号で試みる「働・学・研」協同の総括と新地平

2019年3月末、定年退職を迎えた。経済経営研究科後期博士課程も、開設20年となる。これまでに30人の博士(経営学)を生み出している。博士課程十名ゼミ(産業システム研究会)から送り出した14人の博士(社会人10人、

留学生4人)も、そこに含まれている。10年前のシンポジウム時は4人の博士(社会人3人、留学生1人)であったのが、この10年でさらに10人の博士(社会人7人、留学生3人)を送り出している。後半期の10年をふまえ、博論指導の20年をどう総括するかが問われている。

『名古屋学院大学論集(社会科学篇)』56-3号は、「十名直喜教授退職記念号」として発刊される。せっかくの記念号でもある。ここは思い切って「十名ワールド」とさせていただく。産業・企業研究については、6・7冊目の本(十名[2017][2019])で開示した。そこで記念号では、研究の中身よりも、そのバックグラウンドである考え方や方法論を軸に「仕事・研究・人生」に焦点をあてた。

特集「働・学・研」協同の仕事・研究・人生」を企画し、十名ゼミの博士OBをはじめ産業システム研究会に参加された方々に、特集へ寄稿していただいた。「他者実現」は、果たしてどこまでできたのか、どのようにしてできたのか問われ、検証されることになる。

本特集は、博士論文と向き合っただけでこられた社会人研究者の方々と、指導教員としての筆者との、締めくくりとしての協働作品である。彼らの果敢な挑戦に伴走しながら駆け抜けた全力疾走の四半世紀であった。私自身も、この四半世紀を起点にして、(自らの自己実現に懸命に取り組んだ)製鉄所時代も含む半世紀にわたる「働・学・研」協同の仕事・研究・人生を総括する。

小論は、「働・学・研」協同論を特集するにあたり、その趣旨も含めて提示したものである。「働く」「学ぶ」にとどまらず、「研究する」をしつかりと位置づけ、より多様な視点から深めることで、「働・学・研」協同論の新地平を切り拓きたい。

3 定年退職を機に振り返る仕事・研究・人生

3.1 最終講義—仕事・研究・教育の総括

「生前葬」としての最終講義

最終講義を行うかどうか。その問い合わせが教務課からあったのは、2018年9月末、定年5カ月前のことである。最終講義は、27年間の締めとして欠かせないが、セレモニーとして学内外に公開される。それなりに心して対処する必要もある。

最終講義は「生前葬」ともいわれているが、名古屋学院大学でも、その雰囲気は漂う。わが最終講義でも、それに違わない。司会・進行役がいて、お祈り、あいさつ、略歴紹介がなされる。続いて「最終講義」70分が行われ、花束贈呈、記念撮影で締め括りとなる。

そこで、最終講義をわが「生前葬」と見立て、準備にも力を入れることにした。最終講義の題目は、その直後に出版される本のタイトルとする。本のエキスを軸にして、製鉄所21年、大学27年、計48年にわたる産業・企業研究の総括を織り込む。「生前葬」ということで、当日は家族（妻と次男）も呼び寄せた。次男は会社を休んで東京から、妻も明石から駆けつけてくれた。

最終講義は、2019年1月11日（金）1限目に、「現代産業論」（1限目）と「産業社会学」（2限目）の合同講義として行われた。大教室でも収容しきれないとみて、一番大きな「クラインホール」を確保したのは、正解だった。出席者は、学部受講生の9割近い250人、OB・学内外教員・一般50人の計300人近くに上った。

出席者の中で、一番の苦手は家族である。チョンボをしようものなら、面白おかしく脚色され、後々まで語り継がれよう。何よりも学生の前で、

満足のいく講義をして花道を飾りたい。そんな思いから、リハーサルを数回行い、本番に備えた。これまで27年間の講義において、リハーサルをしたのは最終講義のみである。

お祈り、あいさつ、略歴紹介を経て、壇上に立つと、いつもとは違う厳粛な雰囲気は漂う。それに臆することなく、むしろベストに近い形で70分の講義を全うすることができた。

講義が済むと、花束贈呈へと進み、学部生2人と大学院生2人から花束をいただく。最後の舞台となったのが、記念写真である。会場は、後方にせりあがっている。この構図を生かし、筆者や家族、花束贈呈者などが最前列に、参加者300人は座ったままで、オーケストラの如くバックに収めたすばらしい記念写真を撮っていただいた。

なお、最終講義の全容はDVDに収められ、2セット分が退職者に記念品として贈られる。せっかくなので、それをYouTubeに流してもらうことにした。しかし、最終講義をYouTubeに流すことは、名古屋学院大学では初めての試みである。

そこで、お祈りやあいさつなどをさせていただく先生方にお伺いすると、YouTubeに登場するのは控えたいご様子。そこで対象は「最終講義」70分に限定し、学生など出席者の顔が映らないように、パワーポイントの映像と講義者のみ撮影する。こうして苦心の末、最終講義のDVD（全体版とYouTube版）ができあがる。そして、YouTube版がオンラインに流されている。すでに実施されている大学もあるようだが、本学では初の試みである。

最終講義の柱—半世紀の総括と即出版本

最終講義の準備と並行して進めたのが、7冊目の単著書づくりである。十名 [2017]『企業不祥事と日本的経営—品質と働き方のダイナミ

ズム』晃洋書房が出版されたのは、最終講義の直後（3週間後）のことである。

本のタイトルを最終講義の題目とし、本のエキスを講義の柱（7割）とし目玉にした。

さらに、仕事・研究・教育人生論（3割）を織り込み体系化に提示したことが特徴的である。名学大27年間の研究・教育（**図表1**）と、製鉄所21年間の仕事・研究を含む「働・学・研」協同の半世紀（**図表2**）を提示する。

「**図表1 名学大での研究と教育の推移（1992～2018年度）**」は、縦方向（時代）は1990年代と21世紀にわけ、横方向（内容）は研究と教育に分けて、わが研究・教育の歩みを俯瞰したものである。

「**図表2 「働・学・研」協同の仕事・研究・教育ダイナミズム**」は、丸い円を4コマ（現場体験・調査、研究、学部教育、博論指導）に分割し、4コマのフィードバック循環を通して、「悪循環（30代）→基盤づくり」（右側）から「好循環（60代）→体系化」（左側）へとシフトす

るプロセスを示したものである。

いつもの講義スピードで話すと、2時間以上かかってしまう。それを70分に収めることができるかどうか。最後を飾るにふさわしい挑戦となる。

最終講義への珠玉のコメント

最終講義について、いつもは辛口の家族は、どう感じたのか。「吃音も出ずに滑らかに話していたのが不思議」（妻）、「格好良かった」（次男）との一言に安堵する。

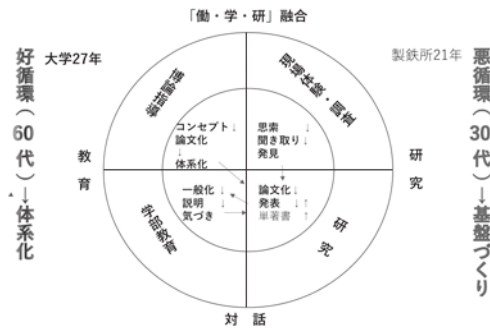
250人の学部受講生が、静かに聞き入ってくれたことが有難かった。彼らのコメントは、温かい眼差しと深く熱い思いが溢れている。最後ということでリップサービスもあろうが、何よりも嬉しい贈り物をいただいた感がする。下記は、その一部をピックアップしたものである。

「現代産業論は、とても広い分野を扱うので、最初、難しいな…すべてが1つの物語になっていた。「毎回の…授業が今思い返すと、とても不思議な空間だった…「十名ワールド」だった」。

図表1 名学大での研究と教育の推移（1992～2018年度）

	研究（単著書）	学部教育	備考
1990年代	1993『日本型フレキシビリティの構造』法律文化社 1996.4『日本型鉄鋼システム』同文館 1996.9『鉄鋼生産システム』同文館 <以上、鉄鋼3部作>	1992「工業経済論」（その後「産業経済論」） 1992「技術論」（その後「現代技術論」）	1992 就任 経済学部 大学院経済経営研究科 97 修士課程 99 博士課程 <博論指導>
21世紀	2008『現代産業に生きる技』勁草書房 2012『ひと・まち・ものづくりの経済学』法律文化社 2017『現代産業論』水曜社 <以上、産業3部作> 2019『企業不祥事と日本的経営』晃洋書房 <7冊目、集大成>	2008「現代産業論」 2008「ものづくり経済論」（全国唯一の科目） 2016「産業社会学」（全国唯一の科目） 2017「人間発達の経済学」（全国唯一の科目） 2019.1 最終講義	2015 発足 現代社会学部 『論集』退職記念号 十名 [2020.1] 「働・学・研」融合の理念と試み

図表2 「働・学・研」融合の仕事・研究・教育
ダイナミズム



「話す言葉には生きた時代、歴史の重みがあり、説得力を感じ…」。「人生という深さを感じた」。「生前葬を行い、新しい自分、新しい道へ進もうという姿は格好いいな…」。

「周りから何と言われようと自分の軸を持ち、粘り強く何事にも全力で取り組むという姿勢」。「私も常に挑戦して仕事を楽しめるようになりたい」。

他にも教師冥利に尽きるコメントが多く寄せられており、それらを「最終講義」でいただいたことが有難い。

3.2 学部授業と産業・企業研究

学部講義の独自性と体系的

学部では、「現代産業論」「ものづくり経済論」「産業社会学」「人間発達の経済学」などの講義科目を通じ、数千人の受講生と接することができた。「ものづくり経済論」「人間発達の経済学」は、他大学にはない本学独自の科目である。カリキュラム（科目）に、自らの研究・教育成果を反映できたことが有難い。

4科目の計60コマ（15コマ×4科目）を、いかにわかりやすく体系的に提示できるか。いかに興味深く話すことができるか。なかなかの難題である。

これまで産業・企業研究とくに7冊の単著書のエキスを、講義に織り込んできた。各科目には、他大学にはない独自性と体系的を持たせるように心がけた。しかし、学部生にそれが伝わるかどうか。講義はいつもプレッシャーとの闘いであった。それは、自らの産業・企業研究と学部講義をどう循環させていくかという課題とのせめぎ合いであったといえる。

講義でのプレッシャーと醍醐味

講義の直前は、学会発表以上に緊張することも少なくなかった。論旨の展開や話し方、学生の反応など、授業の手応えは、次の講義に反映させていく。そうしたなか、面白さよりもプレッシャーをより強く感じていた。

それが、定年が近づくにつれ少しずつプレッシャーも薄れていく。むしろ、リラックスして臨み、ひらめきや楽しさも感じるようになる。プレッシャーとのせめぎ合いの象徴となりフィナーレとなったのが、最終講義である。

定年後は1年限定で、上記4科目の講義を非常勤で行う機会を得ている。心を込め蘊蓄を傾けて語りかけ、若者の反応を肌で感じるなか、講義の面白さやダイナミズムに触れるなど醍醐味をかみしめている。

学部ゼミでの論文指導

学部ゼミで指導した卒業論文は、400本に上る。彼らとの対話・交流から、実に多くのことを学んだ。博論指導などが比重を増すにつれ、卒論指導などにしわ寄せが及ぶようになる。そうした反省から、卒論指導をより丁寧に行い、卒論冊子を発行し、彼らから積極的に学ぶように心がけた。定年直前の数年間のことである。

また2年ゼミさらに1年ゼミ（半年）でも論文指導を行い、小論文を書かせる。全員がノートパソコンを開き、1人数分ずつ巡回指導する。画面を一緒にみながら校正し、文章や論文のコ

ッを伝えていく。1年生でも、1か月ほどでびっくりするように変身することも少なくない。

学部ゼミは、全体として地味で平凡な活動にとどまり、反省することばかりの感がする。ゼミ生とは、ゼミでの議論や論文指導を通してだけでなく、講義の中で心の対話をしていると感じることもあった。

学部授業と博士課程との連携

なお、学部講義およびゼミでは、現場見学や経営者を招いて第一線現場の息吹を伝えることが思うようにできない。そこで、企業連携プログラム（講義科目：企業研究1・2）を立ち上げた。

会社・工場見学（企業研究1）、経営者・専門家のリレー講義（企業研究2）を隔年で交互行うというプログラムである。

ゼミ活動だけでなく、講義科目（現代産業論、ものづくり経済論）とも補完し合い、さらに学部全体にもまたがるようにした。

企業研究2のリレー講義では、博論ゼミで博士号を取得した経営者や専門家も多数招聘した。こうして名学大の博士課程と経済学部・現代社会学部の教育・研究連携が実現し、10年以上にわたり発展させてきた。企業連携プログラムを円滑に運営・維持することは、かなりの労力を伴う。経済・現代社会の両学部教員が数名チームを組み、協力し合い協働で運営することにより乗り越えてきたのである。

3.3 定年退職「狂騒曲」

定年退職に至るプロセス—儀式と集大成

製鉄所21年、大学27年の計48年、この半世紀近い勤務生活に別れを告げる時が来た。これまで紡いできた生活・仕事空間にはさまざまな思いや痕跡がたまっている。そこから出ていくのは、物理的・精神的のいずれも辛いものがあ

り、それなりの覚悟が求められる。

2019年3月末でもって退職した今、心象風景や生活リズムなど様変わりした感がある。「狂想曲」は鳴りやみ、これまでにない静寂のひと時も顔をのぞかせている。定年退職に至るプロセスそのものが、定年の足音から「狂想曲」へ、さらには静寂へと変貌を遂げていく舞台にもなった。

そこで、まずは退職前の道のりをふり返ってみたい。残り3年を切る頃に、カウントダウンの鐘の音が静かに響き始めた。その響きは、月日が経つにつれて大きくなり、月日の過ぎるスピードもアップし、「狂想曲」へと化す。定年直前の数ヶ月は、「狂想曲」が鳴り響く、嵐の如き時空間を突き進んだ感がする。

退職前の半年は、予想よりもはるかに大変だった。最終講義（1月11日）、研究室&マンションの引っ越し（3月8-14日）だけでも、大仕事である。学部、教員組合、研究会、有志など各種送別会も催していただいた。

そこに、7冊目の本の出版に向けた仕事がかかる。7冊目の取り組みは、（出版1年前の）2018年2月に着手した。半年間かけて原稿を仕上げ、出版社に持ち込んだのが夏場で、出版社が確定したのは2018年9月末のことである。出版原稿の編集そして校正にさらに3~4ヵ月かけ、2019年2月初めに出版にこぎ着ける。この1年間で、（学会や研究会での発表や出版社との調整なども含め）約1000時間を投入したことになる。

本・資料類・生活用品の大整理—研究室&マンションの引っ越し劇

研究室&マンションの引っ越しに向けた一連の作業は、最終講義よりもはるかに大変だった。肉体的にハードで、精根尽きるほど傾注する。引っ越し品を収容できるように、自宅（書庫と

書齋)の大整理も並行して行う。27年間(瀬戸15年,名古屋12年)にわたる週ごと単身赴任生活のツケが溜まり,4拠点(研究室,マンション,自宅の書庫,書齋)は,ジャングル化していた。

「ジャングル」にしばしたじろぐも,気合を入れて立ち向かった。研究室とマンションの本・資料,そして生活用品は7割,自宅(書齋・書庫)の本・資料は4割,の処分(「断捨離」)を決意する。大整理に向けて,まずは,コピー類や雑誌・冊子などを中心に全体の2割近くを処分してスペースを確保する。残した本・資料は,ジャンル別に揃え,要・不要に仕分け,本棚も別にした。「不要」分については,本棚ごと処分する。出張買取で,古書専門業者に大学と自宅に来てもらい,7段詰めの本棚7本(研究室4本,自宅の書庫3本)を引き取ってもらった。

大整理と引っ越し(出し,受け,収納)は,200時間に上った。蔵書では,冊子を含め3,000冊以上を処分したことになる。2007年1月,瀬戸市から名古屋都心へのキャンパス移転に伴う引っ越しでは,腰痛に罹った。その12年後となる今回の大整理・引っ越しは,数倍大変であったが,腰痛も出ず元気になり越えた。

定年退職の「ごあいさつ」と手続き

定年退職の「ごあいさつ」をする機会も,最終講義&お別れ会,組合総会,退職辞令交付式&昼食会,教授会,各種送別会など10回以上に上った。

定年退職に伴う諸手続きは,遠方への引っ越しに伴う手続きも重なり,思いのほか煩雑であった。

この間,通常の授業や雑務などをこなしながら,何とか済ませ,元気に定年を迎えることができた。2019年の1~3月は,定年退職・引っ越し「狂想曲」が鳴り響くなか,それらへの対

応にかかりきりで,新たな研究などほとんど手つかず仕舞いで終わる。

3.4 「思えば遠くへ来たもんだ」—「狂想曲」を経ての感慨

スペース・タイム・スリップ(Space-time slip)

退職に至る数ヶ月間の嵐そして「狂想曲」を経て,これまでとは違う時空間に一気にスリップした感がする。新年早々の1月初めと3か月後の4月初めとでは,心象風景が大きく異なり,別次元のような感もする。

「現役を退く時期に感じる,時間・空間そして人間関係などでの今までとは何か違う異次元空間の感覚は,私もまったく同感です。2009年に社長職を引退し顧問職に転じた折によく感じました。皆さんが同じような思いをされているようです。」(太田信義,2019.4.9)

この感覚は,サラリーマンも同じなんだと納得する。現役時代への思い入れが強いほど感じるのかもしれない。

この1年余,夢中で駆け抜けた。そして,異次元の時空間へスペース・タイム・スリップしたのである。「思えば遠くへ来たもんだ」(海援隊,1978年)の歌詞がびったりで,なつかしい曲が静かに聞こえてくる感がする。「思えば遠くへ来たもんだ…ふるさと離れて30年…この先どこまで行くのやら」。

この1年余,原稿執筆から出版まで7冊目の本に傾注した時間は,約1,000時間に上った。直前の3か月(1-3月)は並行して,研究室&マンション退去に向け本・資料類の大整理に明け暮れ,約200時間に上った。最終講義,退職の送別会・あいさつ等々も重なり,まさに嵐の中を潜り抜けてきた感がする。

退職前のほろ苦い洗礼

7冊目の本(十名[2019])を退職直前(2月)

に出版した。「逆転の一打」としての思いと期待を込めて送り出したが、売れ行きなど芳しくない。そのショックは大きく、定年後以降の研究人生を切り拓くうえで壁として立ちはだかっている。

社会や学会、職場などにどこまで広く深く配慮できているか。過度な忖度は論外であるが、主張を打ち出すことに気を取られすぎていたのかもしれない。これまでの自分よがりの幻想が砕かれ、厳しい現実を突き付けられた感もしている。

定年退職ショックに出版ショックが加わり、増幅されてのしかかってくる感じがする。敢えて挑戦した結果とはいえ、退職直前直後のほろ苦い洗礼といえる。それを、今後の生き方、処し方、そして研究のあり方に活かしていくようにしなければと思う。

足らざるを嘆くだけでは、未来は切り拓けない。これまでやってきたことの成果もしっかりと見据え、その挽回も織り込んでの生き方・研究へ新たに挑戦していきたい。

自宅の書庫と書斎の再発見—新たな可能性に気づく

研究室、マンションのいずれもなくなり、残ったのは自宅の書庫と書斎だけである。思い切った整理を行った結果、書斎と書庫も見通しが良くなり、予想を超えた収容能力が浮かび上がってきた。本棚に目を転じると、書庫に11本（実質13本）、書斎に2本、計13本（実質15本）の本棚が並ぶ。大学の研究室には7本の本棚を入れていたが、その2倍の収容力がある。蔵書も仕分けが進み、これまで以上に活用できる体制になっている。

大整理を行う前は、これほどの収容力が自宅にあるとは気づいていなかった。とくに書庫はジャングル化していて、スペースも研究室の

2/3ぐらいと感じていた。本の収容力も2/3程度とみていた。

書庫は、本棚が並び通路があるだけである。本棚には、各分野の本が交錯し、2列置きで奥の本が見えにくい段も多い。英国留学から持ち帰った数百本のテープや資料は、20年手つかず。また鉄鋼や陶磁器関係、その他の調査資料など10年以上手つかず。それらの資料・冊子などが、書庫のスペースを占領していた。通路には、妻が持ち込んだ生活用品も置かれて、行く手を阻んでいたのである。それらの大部分を処分してスペースを空け、残りの本・資料も4割を断捨離すると、元来の大きな収容力が見えてきた。

書庫と書斎は快適な研究空間に変身

書庫は、研究室の2倍近い本棚が配置され、分類化された本が1列に並ぶ。小さな図書館の様相を呈するなど、魅力的な知的空間へと変貌を遂げている。

書斎も、大きく変わりつつある。書斎の本・資料はスリム化し、さらに残った分の1/3は書庫に移して、本棚のスペースに余裕を持たせた。これまであった机2つ、椅子2つ、古いプリンターなどは、処分する。その代わりに研究室とマンションから持ち込んだのが、大きな机と立ち机、快適な椅子2つ、デスクトップのパソコン1機などである。それらが、書斎の快適性を高めている。

持ち込んだ生活用品など、整理しきれいなものもある。それでも書斎は、余裕のある本棚に、大きな机と立ち机、パソコン2機が加わり、快適な知的空間へと変貌した。大きな机と立ち机には、デスクトップを1台ずつセットし、「座ってよし、立ってよし」となっている。読書や論文・資料・メモの作成などは、座ってできるし、立ってもできる。

大きな机では、座ったまま落ち着いて作業する。運動不足を感じるときや、リズムが出てくると立ち机に向い、立ったまま本を読み、執筆などを進める。忙しくても、座り病などの運動不足を防ぐようにできる。

研究室ではできなかったような作業環境が整い、研究ができるという状況が生み出されている。それを活かすような課題や仕事が見いだせるかが、問われている。

3.5 定年退職（70歳）後の視座と再挑戦

1997年と2019年—立ち位置と視界の変化

「働き学ぶロマン」の投稿から、さらに22年経過した。大学に転じて27年となり、定年退職を迎えた。当時と今の状況は何が違うのであろうか。人生の経験も重ね、より複眼的に位置づけ捉えることができるのではと感じている。

1997年当時は、鉄鋼マン時代を中心に、鉄鋼3部作12を仕上げた直後の高揚と反省をふまえ、それまでの社会人としての仕事と研究の四半世紀をふり返ったものである。

製鉄所時代は、企業内でのキャリア形成すなわち処遇の壁にぶち当たり、それとの葛藤が大きな負荷になっていた。研究面でも、大きな壁に直面する。企業主義のしがらみから抜け切れず、独自のスタンスを見いだせずもがいていた。30代終盤の1987年、恩師の勧めもあって新設の社会人大学院に入り、恩師の下で研究のリフレッシュを図る。企業主義のしがらみを超え、独自の視点とアプローチを見出していく。

それが、「日本型フレキシビリティ」論と産業システム・アプローチである。43歳で大学に転じるや、それまでの研究を体系化し、一気に3冊の単著書に仕上げ出版するに至る。その時の手応えと精神的な高揚が、「働き学ぶロマン」を生み出したのである。しかし、そうした

歩みを、理論的・哲学的に深く捉え洞察するに足る力量が伴っていなかったようである。「落選」は、その警鐘といえよう。

さらに、22年を経た。今や、70歳定年という節目を迎え、半世紀をふり返るという位置にいる。大学27年となり、鉄鋼21年も優に上回るなか、大学27年をどう総括するかが問われている。

この22年間で、わが産業・企業研究も大きな変化がみられた。鉄鋼産業を軸にしたグローバル・大企業研究から、陶磁器産業を軸にした地場産業・中小企業研究へと大きくシフトする。40歳代終盤から50歳代にかけてのことである。

そして、グローバル産業・大企業研究と地場産業・中小企業研究をふまえて、その理論化・体系化に挑戦したのが、60代であった。

7冊目の本について、多くのコメントを献本者からいただいている。産業研究の第1人者から3月初めにいただいたコメントには、「研究者としての執念」という表現がみられる。

「神戸製鋼所の品質データ改ざんのニュースに、十名さんのことを思い出していました。真面目で有能な十名さんを締め出した同社の企業体質に不祥事を起こす要因があったのだと思います。現場労働者の置かれた状況と企業体質から不祥事の要因を解明し、企業改革の方向性を提示できるのは十名さんの他にいないと思います。短期間で、定年退職前に成し遂げられた十名さんの研究者としての執念に敬服しております。」

この「研究者としての執念」とは何か、何であったかが、今やあらためて問われているといえよう。

3.6 「働き学ぶロマン」(十名[1997])の発掘

—現代的視点から問い直す

研究室と自宅の書庫から幻の作品を発掘

定年退職により、2019年3月中旬までに研究室を明け渡すことになっていた。そこで研究室とマンションからの引っ越しに向け、1月中旬からの2か月、自宅の書庫と書斎も含めて、4拠点の大整理に明け暮れる。

すると、思わぬ拾い物に出くわす。研究室だけでなく自宅の書庫からも、22年前に「自分史文学賞」に投稿した十名[1997]『「働き学ぶ」ロマン』が、相次いで出てきた。旧ワープロで作成した8～9万字の随筆である。製鉄所に入ってから退職するまでの21年間、大学に転じて5年半、計27年近い「働・学・研」協同の歩みについてまとめたものである。

これまで、何回か探すも見つからず、幻の作品と化していた。これを下敷きにして、その後の「働・学・研」協同についてまとめよう。そのような想いに何回か駆られるも、その前にやるべきことが重なり、果たせなかった。そこで、定年後の最初の仕事にしたい。そのように思っていたところに、幻の作品が出てきたのである。

会社と研究の両立をめぐる葛藤や模索などを赤裸々に綴っており、落選になったこともあって、家族にも見せなかった作品である。突如姿を現したことや定年退職ということもあって、気持ちに変化が生じた。この作品のことを、送別会などで触れたこともあって、ごく少数の方に読んでもらう機会があり、コメントもいただいた。その一部を紹介したい。

「「働き学ぶロマン」の醍醐味は、会社において異端の処遇と体験のなかで、それをバネとし、働きながら学び研究することで、自らの生き方を切り拓いた道程が、リアルに描かれている点にあると思います。…

日誌が残されていて、それを文書に織り込んでいることで、とてもその時の心情が伝わってきました。とくに、仕事と研究の壁からスランプに陥って、精神的にも闇を抱えていた時、そこからの克服を綴ったところはその時の心情が伝わってきました。」

「なぜ会社は、このような人事を許したのか、どんな不安と怯え、妬みなどがあったのか。それは会社のどんな体質からなのか」

「大学への転職が決まった時、先生の知人の方が「働きつつ学ぶ」活動の終わり、挫折」と言われたと書かれています。私にはこの意味がわかりませんでした。…「退職時の無念」ということをおっしゃっていましたが、何が無念と思われるのか…」

コメントに対するリプライ

下記は、コメントへのリプライとしてまとめた一部で、コメントャターにもお送りしたものである。半世紀近い葛藤と相克を率直につづられている。少し長くなるが、紹介したい。

「怨念」から「無念」さらに「執念」へ

実に面白く刺激的なコメントをいただき、ありがとうございます。

会社での「異端の処遇と体験」は、実に辛くやるせない体験でした。その傷は深く、うずきを感じることも今もあります。大学に赴任して間もない頃、若い先生から「なぜ、それほど精神的に研究されるのですか。その推進力は何ですか」と聞かれたことがあります。「怨念です」と応えたとのこと。「衝撃的な返答で、今も覚えています」と当先生から言われたのは、退職時のことです。四半世紀を経てのことですが、今の私なら「無念」あるいは「執念」と応えるかもしれません。

今にして思えば、製鉄所での21年間は珠玉

のような体験でもあったといえるでしょう。それは、深い影ともセットになっていました。30歳代になると、会社の処遇は厳しさを増して無念なこともあり、「見返してやるぞ」という思いに駆られることが少なくありませんでした。自らの拠り所とする研究面でも、思うように進まなくなり焦りが強まります。会社と研究という2つの壁にぶちあたり、悩みが高じて精神的な不調にも陥ります。その袋小路から脱出しようとして必死にものごいたのが、30歳代でした。

その逆風の時代を、挫けずに全力で立ち向かったことが、30歳代末からの反撃の土台になったと感じています。

「怨念」という表現には、「会社の仕打ち」への無念、「こんなはずではなかった」という自責の念、「見返してやるぞ」といった種々の思いが、込められていました。

一方、「無念さ」という言葉には、精神的に追い込まれスランプを招いた自らの弱さや至らなさへの反省がより大きな比重を占めています。

大学に転じて間もない40歳台の頃は、「怨念」がピークに達していたようです。しかし、年を重ねるごとに、自らの非力さや至らなさへの反省が高じ、「怨念」から「無念」へと変質していったように感じています。「怨念」は、自らへの過信によって増幅されるといえるかもしれません。「過信」というメッキも、年を経るごとに剥けていきます。自らの至らなさを思い知り、「無念」へと収斂されていったといえるでしょう。

今や「無念」は、大学27年間の仕事・研究・人生にも当てはまるように感じています。全力を尽くすも、その思いやエキ스는数分の一しか果せず仕舞い。すべて自らの研究力と人間力の至らなさと感じています。

この「無念」を、70歳代の研究を支えていく力にできればと思っています。それは、「無念」

をはらそうとする「執念」に他ならず、「執念」という方が、よりふさわしいかもしれません。

小が大を制す醍醐味と研究力

「会社と闘い勝利を収めたストーリー」「小が大を制す」は、身に余る評価といえましょう。半ばそう見えるかもしれませんが、しっくりこない感もします。

会社の理不尽と必死に闘っていたのは確かです。ただ、その矛先は1つの会社だけでなく、鉄鋼産業さらには日本の経営へと向けていきました。その視点や方向性がより明確になったのは、30歳代終わりに社会人大学院に入ってからのことです。大学に転じて数年間のうちに出版した3冊の単著書は、いずれもそのような視点から掘り下げ体系化したものです。研究の推進力としての「怨念」は、1会社を超えて鉄鋼産業システムさらに日本の経営を軸とする社会経済システムへと向けられていました。

鉄鋼マンが大学に転じて、「自由」になるや即、高炉メーカーの主導する鉄鋼産業システムおよび日本の経営への批判と再生への処方箋を出版しました。「小が大を制す」とまではいかないが、一矢報いたといえるでしょう。

理論的には、「怨念」から「無念」へとシフトしつつある段階であったといえます。ただ、感性レベルでは、また体感的には、なお「怨念」が鳴り響いていたといえるでしょう。

「小が大を制す醍醐味」は、「働きつつ学び研究する」活動がもたらすパワー、社会人研究力といえるかもしれません。

仕事の本質や面白さは、深く研究する中で見出されることが少なくありません。職場や経営のあり方、産業全体の流れを俯瞰し、歴史的・理論的に捉える力にもなります。そうしてこそ、「小が大を制す」ことも可能になるでしょう。

なお、社会人研究者の魅力や彼らの博論を指

導することの面白さや苦労については、これまで何回か論じてきました。十名 [2012] 『ひと・まち・ものづくりの経済学』第3部10-11章は、それらを編集したものです。

大学人の社会人研究者観—アカデミズムの壁と現場力

社会人研究者を見る目は、この30-40年間で大きく変わってきているように感じられます。20歳代の頃の風当たり、壁の高さは、想像を超えるものがあっただけです。

最初の論文「大工業理論への一考察（上）」が『経済科学通信』に掲載されたのは、1973年秋、25歳のときでした。京大の修士論文を凌駕しているとの評価もいただきました。当時の修士論文は、今の博士論文並みかそれ以上の価値がありました。多くの人は、修士論文の力で大学に就職していったのです。幾つかの学会でも、発表しました。

そうした活動は、民間労働者ではありえないこと、とみられていました。基礎経済科学研究所でも初の快挙で、70-80年代における基礎研の快進撃への弾みとなりました。

そうした活動を快く思わない大学教員もおられたようです。さる学会でのこと、若い大学教員から「君のような民間人が活躍すると大学教員の存在価値が危うくなる」と批判されたことを今も覚えています。

一方、基礎研での労働者研究者のモデルともなされてきました。「働きつつ学ぶ」という理念も、25歳のときのわが随筆のタイトルが起点になったとみられます。在野で研究することの意義を論じていた者が大学に転じる、それこそ「在野研究者の敗北」だと。そのように、映ったのでしょう。

それから40数年が経ち、企業など現場出身者の大学教員もずいぶん増えました。今もなお、

現場出身の大学教員を見るアカデミズムの目は厳しいものとすると、恩師から幾度となくお聞きしています。プロパー出身の大学教員の何倍もの研鑽や研究成果などを重ねることで、そうした壁を超えていけるのかもしれませんが。

研究へのこだわりと情熱はどこから来たのか

「働き学ぶロマン」を投稿した頃（1997年）、理解のある名学大教員にそっと見てもらったことがあります。「働きながら研究になぜそれほどこだわったのか、わからない」とのことでした。「研究しか自分を生かす道はない」と感じていたからでしょう。今だから、明言することができますのかもしれませんが。

1960年代後半の学生紛争がピークの時代に、マルクス経済学を学び、学生運動にも参加しました。大企業に就職すると、それらと決別し、サラリーマンとして処していく。活動家の中には、変身を遂げ出世した人も少なくないようです。

私のような不器用な人間は、それが出来ませんでした。むしろ、企業に就職し製鉄所の現場に入ってから研究に目覚める、という全く逆のコースをたどったのです。会社の独身寮にいたので、そうした生活スタイルは、人事・労務管理に筒抜けとなり、にらまれるようになったのです。それだけであれば、まだ許せたかもしれません。学術誌や学会誌に寄稿するようになり、これは許しておけないとなったのでしょう。

生き方としては、軸のところはぶれずに貫けたのではと思っています。それは、不器用な生き方ゆえでもありました。

なぜ現場にあって研究にこだわったのか。幾つか、理由もあげられます。

アイデンティティとなるものを、他に見つけられなかったから。愚妻は言います。世渡り上手で、会社でも切り抜けて出世していたら、研

究は続けられなかったはずだと。

25歳で「働きつつ学び研究することの意義と展望」を発表し、「働きつつ学ぶ」という理念を羅針盤にしてきたから。基礎研や学会、研究会などで多くの先生方から支援していただいたことも、続ける大きな力になりました。

生き方・研究日誌の効用

30歳代前半に力を入れた日誌ではありますが、精神的な苦境が薄らぐにつれ、まだらになっていきました。

日誌を本格的に再開したのは、英国留学から帰国後の50歳代前半のことです。カルチャーショックから立ち直り、研究の遅れを取り戻したい、という危機意識が促したのです。研究だけでなく、生活のことも大いに綴ります。月1冊ペースの頃もありましたが、今では年に数冊程度となっています。研究のことや生活のことで少しモヤモヤしてくると、メモして整理する、着想を拾い上げる。そうすると、心が落ち着くし、研究の方向性も見えてくる。込み入ったメールの場合も、同じです。ノートにスケッチし、イメージが膨らんできてから、パソコンに向かうのです。

60歳代になって、併行して本格化したのが手帳メモです。大まかな予定を書き込むのも大切ですが、毎日何をしたのかという記録、おこなった仕事項目を簡条書きにメモするようにしました。手帳を見れば、1年前、2年前の何月に何をしたのかが追跡できるのです。

むしろ、記憶力がそれだけ減退し、メモを見ないとフォローできなくなったためといえるでしょう。

今回のリプライも、日誌ノートで粗いスケッチをし、パソコンに向かいました。30歳代の苦境時に始めた日誌ノートは、今や70歳代の友として大いなる力になっています。

数年前、あるいは十数年前のことを、手帳や日誌を手がかりに探すことがあります。殴り書きのようなノートですが、直筆を見ると当時のことが甦ってくることも少なくありません。」

タイトル再考—「働き学び研究するロマン」

今にして思う。「働き学ぶロマン」のタイトルは、「働き学び研究するロマン」にすべきではなかったか。

「なぜロマンなのか」と問われることある。「ロマン」とは、夢や冒険心のことである。生産現場で働きながら、働くことの意味や価値を追求する。いわば、働きがい・生きがいの探求として研究活動がある。そうした心躍る冒険心、逆風に抗し乗り越えていこうとする仕事と研究への挑戦を、「ロマン」と呼んだのである。

そうした視点から振り返ると、タイトルは「働き学び研究するロマン」にすべきではなかったか。その方がより本質的でわかりやすかったかも。企業だけでなく行政、大学などで創造的な仕事を探求している人たちにより深く響くかもしれない。そのように反省している次第である。

定年後の再挑戦に向けて

社会人生活48年（1971～2018）をふり返れば、「働き学ぶロマン」が対象としたのは、その前半期（1971～97年）、いわば青壮年期にあたる。

今、直面しているのは、その後半期（1998～2018）、いわば中高年期をどう総括し編集するかである。それは、今後とも研究を続けていけるかどうかの試金石にもなるであろう。そのノウハウと情熱を、青壮年期の苦闘、そして中高年期の新たな挑戦の中から見出したい。

しかし、何よりも大切になるのは、社会人が手に関心を持つ作品に編集することができるかどうかである。「働き学ぶロマン」に欠け

ていたのは、青年、壮年、老年へのメッセージではなかったか。働き方、学び方、生き方についてのわかりやすいメッセージを、各世代に示すことである。

わが「働・学・研」協同論、自分史は、そのノウハウと哲学を導き出したエビデンスとして位置づけるのが良いのでは、と感じている。

大学卒業までの幼少期～青年前期（～22歳）が「人生の序盤期」とすれば、鉄鋼メーカーに就職してから大学を定年退職するまでの48年、ほぼ半世紀（23-70歳）が「人生の中盤期」にあたる。そして、定年退職を機にスタートする71歳以降は、人生の終盤期といえよう。人生の終盤期がどのようなものになるかは、これからの奮闘如何にかかっている。人生百年時代を生き抜くことができるか。10年、20年単位で、元気に研究を続けることができるか。研究成果をまとめることができるか、新たな境地を切り拓くことができるか。そして、この終盤期を研究と人生の熟成期にできるかどうか。「働・学・研」協同の真価が問われることになるであろう。

次章では、「働・学・研」協同の理論と思想に分け入ることにしたい。

4 仕事・研究・人生の意味とダイナミズム—「働・学・研」協同の理論と思想

4.1 働く、労働、仕事とは何か—それぞれの意味と境界域

「働きつつ学ぶ」スタイル

「働きつつ学ぶ」という言葉は、筆者にとっても万感の響きがある。それを初めて綴ったのは、1973年秋季号の本誌（随筆「働きつつ学び研究することの意義と展望」）においてである。製鉄所勤務3年目、25歳のときのことであった。製鉄所体験の強烈なインパクトと『資本論』

をふまえた大工業論の研究が熱く交差する中で生まれたものである。「働きつつ学び研究する」というスタイルは、その後、「働きつつ学ぶ権利を担う」という基礎研の理念に生かされる。「働きつつ学ぶ」という標語は、わが苦境時のみならず、思いを同じくする人たちの心の灯台になってきたのではと感じている。

「働きつつ学ぶ」活動は、限定した枠内ではあるが、日本企業において広く見られた。M.L. ダートウゾス他 [1990] 『Made in America』（依田直也訳、195ページ）では、「働きつつ学ぶ」という見出しで、日本と西ドイツでは企業内訓練、工場訓練が仕事の中で行われていると紹介されている。「職場で各種の職責を与えたり、頻繁な配置転換の経験を通じて…技能を習得することが通常業務の一部となり、再訓練が職場の日常業務の一部となる」¹³⁾。それは、OJT（On the Job Training）と呼ばれてきたものである。定期人事異動という職務ローテーションによって、企業内のさまざまな職務を経験し、OJTという実務訓練を通して技能や知識を習得し、人脈を広げていく。職務の専門家というよりも、企業内ジェネラリストとして育成されてきた。

「働きつつ学ぶ」という生活スタイルは、特別のものではない。実は、働くことの中に内在しているといえる。しかし、疎外された厳しい労働のもとでは、働くことの意味や面白みが見いだせず、学ぶ意欲や姿勢が減退することも少なくない。むしろ、そうした状況の中でこそ、働くとは何か、働きつつ学ぶことの意味やダイナミズムに目を向け問い直す必要が高まっているといえよう。

「働く」とは何か

「働く」と「学ぶ」は、「遊ぶ」とともに人生の根幹をなす要素である。「働く」とは何か、

「学ぶ」とは何か、問われている。

「働く」は、『広辞苑』によると、「動く」「精神が活動する」「精出して仕事をする」「他人のために奔走する」「効果をあらわす。作用する」などとされ、「徐々に努力して」が含意されている) workの意味合いが多分に含まれる。

「働く」は、人間の「労働」や「作業」、「仕事」など関連する言葉を貫通するキーワードである。また、「自然の働き」や「引力が働く」など法則や原材料、設備などが「効果をあらわす、作用する」といった意味でも広く使われるなど、包括的な響きと意味合い、膨らみをもっている。

日本語「労働」の由来と歴史的文脈

一方、「労働」は「ほねおり働く」の意で、「苦しい仕事」が原義の) laborに照応するとされる。自然のリズムのなか、社交と労働の混合する伝統的な農作業に比べて、近代のはたらき方を表す「労働」は、「組織のなかでの労働」としての性格をもち、ある種の不自由さがある。そのことが、「働く」ことの意味を捉えにくくしている¹⁴⁾。

「労働」は、「労」と「働」に分けて、その由来をみることができる。「ろう」は、『源氏物語』にひらがな表記の用例があり、「骨折り」「経験」「功績」などの意味があったようである。「労」は、「勞」が正確な表記で、災禍などの非常時に「力を出すこと」とされ、転じて「つとめる」「つかれる、ねぎらう」の意味に用いられる。一方、「はたらく」は、『日本国語大辞典』によると、元来ひらがな表記で『宇津保』や『方丈記』などにもみられ、「人が動く」ことを表す。転じて、その結果としての効果も含んだ言葉になったとみられる。

「働」は、『大漢和辞典』によると、「つとめる」「せいだす」などの意味を表し、国字である。「労働」は、『養生訓』や『西国立志編』にもみら

れるように、近世期まで主に使われていた。

laborは、明治初期～中期にかけて「力作」「労働」などと訳され、「力作」には「はたらき」という振り仮名もみられた。「労働」の訳語が広がるのは、19世紀末のことである。「労働」は、近代化の進んだ時代の産物で、翻訳語として定着したものである。

漢語では、「労働」は「身体を動かす」「はたらく」、日本語の「労働」は「骨折ってはたらく」ということで、意味が区別されている。両者の意味の違いが意識されないまま、後者の意味の「労働」がlaborの訳語として生まれ、今や「はたらくこと」の普遍的な意味ともみなされるようになっている¹⁵⁾。

「仕事」とは何か—「仕事」と「遊び」、 「労働」と「余暇」の境界域

「働く」には、「仕事をする」という意味が含まれている。「仕事」も「働く」と同様、日常生活でよく使われる言葉である。「労働」が翻訳語であるのに対して、「働く」、「仕事」は和語である。

それでは、「仕事」とは何か。一般的には、「する事。しなくてはならない事」(『広辞苑』)である。物理学では物体が移動するときに働く力を仕事(単位はジュール)と呼ぶが、一般的・社会的につかわれる「仕事」は、「人の仕事」であり、「他人のためにすること」、「自分と集団との関係を創造的なものとする個人の持続的な活動のこと」である¹⁶⁾。

仕事には、「何かを生み出す、何かをつくりだす」という加算のポジティブな意味が含まれているが、「遊び」には、「何かを使う、あるいは消費する」というネガティブな意味が付加されていて、対照が際立つ。仕事＝労苦、遊び＝安楽といった一般的なイメージに寄りかかった見方が、そこにみられる¹⁷⁾。

仕事が労苦と受けとめられているとき、仕事と仕事でないものは、それぞれ「労働」と「余暇」とみなされてきた。「仕事」と「遊び」、「労働」と「余暇」が対照的に捉えられてきたのである。しかし現在では、そうした二分法が現実のそぐわない状況も出てきている。会社での労働よりも無償のボランティアの方が、かつての仕事、他者のために身体を動かすこととして、「働く」ことの原型イメージにより近くなっている¹⁸⁾。

「労働」という言葉は、経済的な意味合いが強い。労働は、生産のための資源の1つであり、労働者は労働力の担い手である。労働者にとっても、労働は生活のための手段、快のための苦という経済的行為とみなされる。「労働」には苦痛と労苦をとまなう活動という意味合いがつきまとう。

一方、「働く」ことは、経済的資源や生活の手段、手段としての苦痛という以上の意味を持っている。生きることとも深く関わり、生活や人生の全体とつながっている。「仕事」という言葉は、「働く」ことの意味合いをより強く帯びている。「良い仕事」という言葉が、望ましい働き方を考えるキーワードとして提起されている¹⁹⁾。日本社会の今日的課題として大きな関心を集めている働き方改革も、あるべき方向に「良い仕事」が位置するとみられる。

実社会で「働く」場合、むしろ「労働」の側面が強いが、そこに「働く」（「はたらく」）ことの本来的な意味合いをいかに織り込んでいくかが、各位に求められている。そこで重要な役割を担うのが、「働きつつ学ぶ」さらには「働きつつ学び研究する」である。

4.2 学ぶ、研究、創造のダイナミズム

「学ぶ」とは何か

「学ぶ」という言葉には、実に奥の深い響きがある。『広辞苑』には、「①まねをする。ならって行う。②教えるを受ける。習う。③学問をする。」という3点が示されている。「学ぶ」ことの核には、他の人間から何かを教えてもらうこと(①②)がある。また「習う」は、「学ぶ」の一部として位置づけられる。「習う」には、「①くり返して修め行う。②教えられて自分の身につける。」の意味が込められている。

たしかに、「学ぶ」(learn, study)という言葉には、「経験に学ぶ」や「自然に学ぶ」といった表現にもみられるように、「まねぶ」「習う」「勉強する」「研究する」などの意味合いを包括した含みと柔らかさ、謙虚さがある。「学ぶ」は、「学び研究する」を包括したものとみることもできる。

「学ぶ」「習う」「思う」の区別と統合的追求—『論語』に学ぶ

一方、『論語』では、「学ぶ」「習う」「思う」などを区別してみることの大切さも説かれている。

『論語』の冒頭の一節に、「学んで時に之を習う、亦またよろこ説たまばしからずや」の句がある。大切なことを先人から学び、これを幾度も復習して本当に自分の身につける、なんと喜ばしいことではないか。「学ぶ」と「習う」は別次元のことで、その両方が必要である。「学ぶ」には知る楽しさがあり、「習う」には体得する喜びがあるという。自分なりに噛み砕き、工夫することによって、体得する²⁰⁾。

『論語』には、「学びて思わざれば即ちくらく思あやういて学ばざれば即ち殆あやうし」の警句もある。人から学んだことを、ただ覚えるだけで、その意味や応用について思索をめぐらさなければ、

バラバラの知識にとどまり、視野は開けず知恵も出てこない。他方、自力で思いをめぐらすばかりで、広く体系的に学ぶこと（すなわち情報や知識を収集し蓄積すること）を怠ると、空想的・独善的になりやすく脆く危険でもある。「学ぶ」ことと「思う」こと、すなわち知識を収集・蓄積することと思索をめぐらすことは、いずれも大切であるという。両者のバランスのとれた営みを何よりも重んじている。

「思う」こと、とは何か。学んだことが、社会の出来事や体験とどのようにつながっているのかなど、思索をめぐらすことである。それは、論理的に思考することでもあり、その過程で、ひらめき、インスピレーションとも呼ばれる「科学的直観」もしばし訪れる。創造的活動へ、研究へとつながっていくのである。

「研究する」とは何か—「学び」を究める

「研究する」は、「学ぶ」と「思う」の良循環、いわば弁証法的な発展、とみることができる。

それでは、「研究する」とは何か。一般的には、「良く調べ考えて真理をきわめること」（『広辞苑』）である。まさに課題と向き合い「学び」を究めることが、「研究する」ことに通じるのである。「研究する」ことは、自然および社会における未解決の課題にアプローチし、新たな知見を示すことである。まず課題の設定から始まる。そして課題解決のために必要なデータ・情報を獲得し、それらを解析して結論を得ることである。調査および観測、測定などは、データ・情報を得るための方法であり、研究の横の広がりを示すものである。一方、得られたデータ・情報を解析し結論を得る活動は、研究の縦の広がりを示すものである。

「研究する」は、「研ぐ」と「究める」の合成語でもある。『広辞苑』によると、「研ぐ」は「磨く」「擦る」「練磨する」こと、「究める」は「深

く追及して物事の本質や真相をつかむ」こととある。それをふまえると、「究める」は本質や目的に、「研ぐ」はその手段により近い位置にある。「究める」は、「研究する」の要に位置する。

「働く」、「学ぶ」、「究める」は、「労働」、「学習」、「研究」に照応する和語といえよう。「究める」は、「研究する」よりも包括的な響きがあり、多様な意味が込められているとみられる。「究める」は、「真理を究める」という学問の場だけでなく、「技を究める」「仕事を究める」など生産や生活の場でも広く使われている。「道を究める」は、いずれの場にも通ずる句である。耳にすると襟を正される思いがするのは、筆者だけではあるまい。

創造に至る人生3段階説

「学ぶ」ことの奥義ともいえる「③学問する」は、「創造」と深く関わり、「研究する」の核心に位置する。両者に共通するのは、「挑戦する」ことである。

梅原猛は、「学問する」とは「ものを知ること」、「自ら考えること」、「ものを創造すること」にあるとし、その楽しさ、とりわけ「ものを創造することこそ最高の楽しみである」という²¹⁾。人生は、自ら創っていくものであるが、創造するには、長い修練の時が必要である。ニーチェ（『ツァラトゥストラはかく語りき』）は、「人間精神の三様の変貌」を語る。人類の膨大な知識を習得するラクダの人生、既成の知識と格闘するライオンの人生、小児にみる遊びの精神と無心の人生である。それはまさに、忍耐の人生、勇気の人生、そして創造の人生という、「創造に至る人生3段階」説に他ならない。

創造の過程で、ライオンは小児に変身する。それは、伝統的価値との壮絶な戦いの中で、起こる。突如として、ライオンは小児に変貌する。

それは、決して求めて得られるものではない。向こうからやってくるものであり、それこそ本当のものであると、梅原はいう。

「創造に至る人生3段階」説は、「守・破・離」の思想とも重なり合うものとみられる。「守・破・離」とは、物事を習得するプロセスと心得を3段階に分けて示したものである。「守」とは、師の教えを正確かつ忠実に守り、基本を身につける段階であり、「ラクダの人生」に相当する。「破」は、身に付けた技や形をさらに磨き、独自に工夫して新たに試す段階であり、「ライオンの人生」へと変貌を遂げる段階といえる。「離」は、自らの新しい独自の道を確立する段階であり、幼児のような遊びと無心の息づく「創造」の段階である。

「読む」「学ぶ」から「書く」「創造」へ

広中平祐 [2002] は、「創造には、学びの段階では味わえない、大きな喜びがある」が、創造の原型は赤ん坊のようなもので、創造とはそのベビーをいかに育てていくかに他ならないという。また、蓄積だけを続けていては、創造することなく生涯の幕を閉じることになると警鐘を鳴らす²²⁾。

外山滋比古 [1986] も、まとめるというのは面倒な作業で敬遠しがちである。ただ、読むことばかりでは、知識と材料が増えるも、まとめはいつそうやっかいになる。その処方箋は、「とにかく書き出す」ことで、「書いているうちに、筋道が立ってくる」という²³⁾。

書き出すには、勇気もいるし、書いていくうちに没入することも少なくなかろう。ラクダからライオンへ、さらには幼児へと、知らず知らずのうちに変身するのかもしれない。

「読む」から「書く」へのシフトは、「まねぶ」「習う」から「研究する」へ、(狭義の)「学ぶ」から「創造」への脱皮を意味する。そして、「ラ

クダ」から「ライオン」へ、さらには「幼児」へと変身するプロセスでもある。

「働きつつ学ぶ」から「働きつつ学び研究する」への文化的発展

それらの示唆には、「働きつつ学び研究する」活動、その核心に位置する「研究する」ことの意味と極意が凝縮して示されている。

「働きつつ学ぶ」を理念に掲げる基礎研において、筆者は「働きつつ学び研究する」ことの意義を何度も提起してきた。それに対して、次のような反論がみられる。

「働きつつ学ぶ」だけで十分ではないか。「学ぶ」には「研究する」も含まれているので、わざわざ区別して掲げる必要もなからう。

そうした異論は、今後とも絶えないであろう。「学ぶ」という言葉の包括性、その広さ・深さのゆえとみられる。「学ぶ」にとどめず「研究する」を明確にして打ち出すことの今日的意味は何か、あらためて問われているのである。

「学ぶ」には、「まねぶ」「習う」「勉強する」などの初歩的、受動的、半強制的な意味合いも含まれ、それらと同一視する見方も少なくない。『論語』は、そうしたことに警鐘を鳴らしている。「学ぶ」と「習う」「思う」などを区別し、さらにバランスよく統合的に実践することの大切さを説いているのである。

他方、「研究する」には学術的、高踏的な側面もあり、庶民には近寄りにくいものと見なされがちである。そうしたこともあって、「学ぶ」と「研究する」は別次元のものとする傾向も少なくない。

しかし研究そして研究活動は、学者や研究者と呼ばれる人たちの専売特許ではない。今や、日々の仕事や生活における創意的な工夫や改善など、庶民の営みの中にも広く見られるものである。ものづくり、まちづくりなど企業や地域

の経営において、創意工夫を凝らし発展させていくことが求められている。

企業や地域の諸課題と向き合う創造的な活動は、研究過程と重なる特徴も随所に見られ、広く研究活動とみなすことができる。

それらを「小研究」とみれば、科学や技術における画期的な発見や発明、それに学術的な研究活動などは「大研究」と呼ぶこともできよう。

この視点は、ウィリアム・モリス [1877] の「小芸術論」²⁴⁾ にヒントを得たものである。モリスは、「日常生活の身のまわりのものを美しくする」芸術の総体（すなわち「装飾芸術」）を「小芸術」とし、大画家など専門の絵描きの「大芸術」と対置して捉えた。小芸術は、労働を楽しくし、休息を爽り豊かにするもので、美における人間の喜びの表現である。小芸術と大芸術の分離によって、生産活動における小芸術は貧弱になり、生産・販売・消費における喜びも失われるとして、「小芸術の回復」を基盤とする「諸芸術の融合」を提起した。

学びを極める「働・学・研」協同一「小研究」と「大研究」の統合

「働・学・研」協同（「働きつつ学び研究する」の「研究」は、「小研究」をベースにしているが、それにとどまらない。幅広い裾野からなる「小研究」群は、産業活動の活性化とイノベーションを促し、「大研究」を生み出す基盤ともなる。

「学びを極める」²⁵⁾ という表現に注目したい。その過程での「学び」とは、「学び研究する」ことでもある。「学び」と「熟達」は表裏一体で、学ぶ過程は熟達の過程でもある。熟達化の源泉は、想像力にあるといわれる。熟達するということは、その分野の知識のシステムをつくり上げていくことである。持っている知識を使って想像することは、創造力の源泉となる。熟達化のプロセスは、想像と創造のプロセスでもあり、

「小研究」が息づいている。

4.3 「働・学・研」協同の主体と実践の価値 「働く」「学ぶ」「研究する」の分離から再結合へ

「働く」「学ぶ」「研究する」は、深くつながっているが、日本社会では近代化の進行に伴い分割・分離して捉える傾向が見られた。「学ぶ」は学校、「働く」は企業や自治体、「研究する」は大学や研究所など学術・研究機関にて、あるいはものづくりは企業、ひとづくりは学校、まちづくりは地域や自治体にて行われる、というように。

「働きつつ学び研究する」活動、すなわち「働・学・研」協同による仕事の進め方は、「働く」「学ぶ」「研究する」を主体的につなげていく活動といえる。それは、資本主義的な分離から人間的な再結合への道であり、「手づくり」による等身大の産業・地域システムづくりに他ならない。わが産業研究のプロセスも、等身大のアプローチとして位置づけることができる。

1 次的現実の思考と創造性

外山滋比古 [1986] は、大学人（などの知識人）と社会人との比較視点から、働くものの思考とその成果に光をあてたものとして、注目される²⁶⁾。

これまでは、「見るもの」「読むもの」など知的活動による頭の中の世界（第2次的現実）の思想が尊重されてきた。「働くもの」「感じるもの」（第1次的現実）の思想は、価値がないと決めつけられてきたのである。

むしろ、第1次的現実、複雑に絡み合う多様な課題と価値の垣塙でもあり、「額に汗して働くものもまた独自の思考を生み出す」。

第2次的現実が第1次的現実を圧倒している現代においては、人々の考えることが抽象的に

なり、言葉の意味する実態があいまいになる。映像などによって具体的であるかのような外見をしていても、現実性は著しく希薄である。

それゆえ、「1次の現実に着目する必要がそれだけ大きい」。社会人の思考は、第1次の現実根に根を下ろしていることが多い。「汗のにおいのする思考がどんどん生まれてこなくてはいけない」という。それは、まさに社会人研究者に対するエールにほかならない。

しかし、第1次の現実から生まれる思考は、既存の枠組みの中におとなしくおさまっていない。「真に創造的な思考」は、そうした「第1次の現実根に根ざしたところから生まれうる」。それを単なる着想、思いつきに終わらせないためには、システム化を考える必要がある。

「働・学・研」協同の循環型産業システムづくり

それは、「等身大のシステム」づくりにも深くつながる。わが産業システム・アプローチ、ものづくり・ひとづくり・まちづくり、山・平野・海を三位一体的なシステムとして捉えるという理論的・政策的な提起は、そうした課題に応えるものといえよう。

それらの課題を担う創造的な主体、いわば現代の知的職人にあたるのが、社会人研究者とみることができる。

これまでにない創造性が各職場・地域に求められるなか、その手がかりは、自らの仕事をより深い視点から見つめ直すことにある。それを通して、産業、経営、地域の諸課題を掘り下げ、創造的に捉え直し、政策的な提起につなげていく。まさに、「働きつつ学び研究する」（「働・学・研」協同）活動にほかならない。

「働く」「学ぶ」「研究する」は、産業と地域の現場を支える基本的な要素である。それら3要素は、深くつながっており、創造的な現場で

は共鳴し合い循環している。それを描いたのが、「図表3 「働・学・研」協同の循環型産業システム」である。

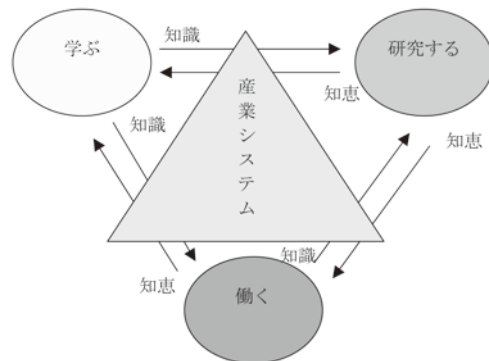
循環型産業システムを機能させるポイントは、2つあるとみられる。1つは、適切な見取り図と道標である。大局的かつ中長期的な視点を織り込んだ深い理論と政策が、それにあたる。

2つは、それを担いリードする主体である。それらの課題を担う創造的な主体が「知的職人」であり、経営や地域の現場で「働きつつ学び研究する」社会人研究者はその重要な一翼を担う。自らの仕事や人生をより深く捉え直そうとする活動は、まさに研究にほかならない。

働く現場は、情報と経験知の宝庫でもある。生きた現場情報の膨大な渦の中にあって、五感を通して体験・入手できる。それを自覚し、明瞭な問題意識や視点と結びつけることにより、種々のハンディキャップを乗り越え、創造的な研究も可能になる。社会人研究者の可能性と役割もそこにあるといえよう。

近年では、定年などで退職された方も増えているが、長年働いた仕事と職場のアイデンティティは朽ちるわけではない。むしろ、その経験知（その多くは暗黙知）を引き出し、研究とし

図表3 「働・学・研」協同の循環型産業システム



注：十名 [2017] 『現代産業論—ものづくりを活かす企業・社会・地域』水曜社、171 ページ。

てまとめていく可能性を秘めた人材といえよう。

5 日本における「働・学・研」協同の伝統と創造

5.1 勤勉と学び心の伝統

かつて勤勉と向学心は、日本人のアイデンティティとみなされてきた。遣唐使の留学生にみる学びの覚悟から、江戸時代の寺子屋の隆盛に至るまで、仏教に学び、漢字を受容しつつ生み出した仮名(ひらがな・カタカナ)を活用し、洗練された独自の文化と技術をつくりだしてきた。仮名の創造は、シンプルを旨とする日本文化とくに「型」文化の源となり、漢字と融合して学びをより容易に楽しくするなど庶民の学びを支えてきたのである。

幕末維新期に日本を訪れた外国人の多くが、日本人の識字率の高さを称賛しているように、江戸時代の日本人の識字率はすでに世界一で、幕末期には(農村部を含む)江戸府内において江戸生まれのもので85%、江戸市中ならばほぼ100%に達していたとみられる²⁷⁾。

庶民にも教育の必要性が語られ始めるのは、市場経済の影響が顕著になりつつあった17世紀末の都市においてである。寺子屋の普及も都市から始まり、農村へと普及していった。江戸時代は文書社会となり、幕府や藩から村や町への指示も文書で、商売にも文字や文書が欠かせない。必要に迫られての寺子屋教育は、読み書き能力と生活道徳の学びが密接に結びついてきたが、次第に儒教の影響を強めていき、道徳的で主体性を尊重するおおらかな学習観が一般的となる。寺子屋の普及に伴い、文字を駆使した文化が成熟し、生活の折々に俳句を詠む習慣など、学びを楽しむ洗練された文化が生活の中に根づいていくのである²⁸⁾。

江戸時代の学び文化をリードした3巨星として、前期の貝原益軒(儒学者、教育家)、中期の石田梅岩(石門心学の祖)、江戸末期の二宮尊徳(篤農家、605町村を復興)があげられる。貝原益軒の朱子学的な理想主義は、後世の庶民教育思想に大きな影響を与える。封建社会における商人の道を説く石田梅岩の石門心学は、勤労・勤勉・質素・儉約を主張する一大教化・学習運動として展開され、農村や武士階級にも浸透していった。

農村復興を成し遂げた二宮尊徳の手法や精神を学ぶ報徳運動は、勤勉・勤労を説く精神運動の2度目の波であった。勤労・勤勉によって生まれた剰余は、石門心学のように否定されるべきものではなく、「推譲」により拡大再生産をめざして投資される経営資源とみなされたのである²⁹⁾。

5.2 戦前日本の児童教育にみる生活と学びの結合—貧困に立ち向かう生活綴方運動—

工業化が進行する戦前日本において、資本主義的貧困と封建的因習が広がる環境の中、恐慌によって悲惨な状態におかれた子どもたちを救おうとする教育運動がみられた。教師たちによる生活と学びを結合させる運動である。子どもたちに生活事実を直視させ、それを綴らせ、教室で検討することにより、社会認識を育てようとするものである。それは生活綴方運動といわれ、全国に広がったが、とくに貧しい東北地方で活発であった。

子どもを「奔放な吸収力と、同時に猛然とした消化力を持つもの」として捉え、もっとも必要なのは、「意欲性」が「知性」をとらえ「生活的知性」を獲得することにあるとみる。現実の暗さから目を背けるのではなく、生活の事実を把握させることにより、その事実を克服する

力を獲得させようとしたのである³⁰⁾。

戦後、生活綴方運動は再興されるが、高度成長に伴い管理と効率が進むなか、後退を余儀なくされていく。

5.3 「働・学・研」協同の試みとポスト工業社会

「働・学・研」協同とは、「働きつつ、学び、研究する」ことである。これらは、資本主義の発展に伴い、それぞれの効率性が追求されるなか、相互に分離・分化して独自の発展をたどってきた。分離・分化が極限的に進行するのに伴い、働くことや学ぶことそのものの疎外も深まり、働くことや学ぶことの意欲や活力の低下をもたらしている。

かつて、勤勉と向学心は日本人の拠りどころ、DNAとみなされてきたが、今や神話と化しつつある。「勤勉」には、「額に汗して働く」という生産労働のイメージも含まれている。直接的な生産労働が減少するなか、勤勉倫理は大きく後退し、精神的報酬の希求へとシフトしてきている³¹⁾。また向学心も萎え、むしろ「学び嫌いの日本人」としての様相が目立つようになる。小中高生の多くは家庭でさほど勉強せず、家庭での学習時間は先進国ではほぼ最低の部類に属し、大学生の本を読まない傾向も顕著になる³²⁾。

学ぶ意欲の低下は、生き抜く力の低下となり、国の未来を危うくする。しかし、他面からみると、日本社会には、江戸時代にみられた学びと生活の一大結合運動、工業社会における労働との新たな結びつき、さらには近年における仕事と学び、研究を結びつけようとする社会的な流れなど、学びの欲求と伝統は今も脈打っていると思われる。まさに、「働・学・研」協同の思想と実践は、日本社会の伝統に深く根ざしたも

のといえる。そして、今日のポスト工業社会(いわゆる知識社会)において、「働きつつ学び研究する」という人間発達の新しいスタイルとして甦りつつあり、日本の知的再生に向けた確かな水脈と捉えることができる。

東西に共通することわざに「よく学びよく遊べ」(「Work hard and play hard」)があるが、そこでは学ぶと働くが同義一体のごとく使われている。「働きつつ学ぶ」は、本来一体のものとみることができる。「よく働く」ことは、「よく学ぶ」ことを促すなど「よく働きよく学ぶ」道につながり、さらに「よく学びよく遊ぶ」ことを可能にする。「働・学・研」(さらに「働・学・遊」)は、本来一体のものといえよう。「働・学・研・遊」の協同さらには融合が、本来的な姿とみられる。しかし資本主義の発展とともに、それらも分離・分化し多様化するなか疎外を深めてきた。

再結合、融分化に向けた「働・学・研」協同の試みは、人間らしい仕事や生活・人生を取り戻し、その質を高める創造的な挑戦であるといえよう。

5.4 戦後の品質管理活動にみる生産現場の「働きつつ学ぶ」運動—経営主導の光と影

明治維新以来、とくに第2次世界大戦以降の日本の歩みは、試行錯誤を伴いながらの「創造的な学びのプロセス」であった。「ラーニング・ソサイエティの構築」を掲げるスティグリッツは、日本の歩みを「ラーニングとイノベーションの歴史」と捉える³³⁾。

戦前から戦後復興期にかけて、日本製品といえば「安かろう 悪かろう」のイメージで、安物・低品質の代名詞とみなされた。それを根底から覆す契機となったのが、デミング・システムと呼ばれる品質管理の思想と実践である。企

業を中心にまき起こった経営主導の品質管理活動は、日本的にアレンジされ、現場発学びの大運動の起点になった。

デミングの品質管理論は、職務枠を超えた協働を求め促すものである。それは、日本の大企業が志向した経営主導の協調的労使関係とも共鳴する側面を有し、階級的から労使協調的な労使関係へとシフトする推進役（踏み絵）としても機能した。

日本的な品質管理活動は、①品質のつくり込み、②全員参加、③継続的改善などに特徴がある。

設計・各工程での「品質のつくり込み」は、高品質と低コストを同時に達成することに眼目があった。両者はトレードオフの関係とみなす欧米とは、一線を画すものである。なぜ日本で品質とコストの同時達成が可能になったのか。

それを解く鍵の1つが、小集団活動である。「全員参加」のもと、作業者が品質管理に参加し、小集団活動として、各職場丸ごと参加の形で行われた。現場の監督者・作業者が、基礎的な品質管理手法を学習し習得しながら、改善活動を進めていく。それらの大半は、時間外に行われたが、彼らの自己実現欲求などを刺激し、仲間との連帯感なども高めて士気の高揚につながった。

QCサークル活動は、「自主参加」とされ、長きにわたり残業代も支払われなかったが、その成果は勤務評価に反映されてきた。生産現場を中心とする学びと高い労働意欲、改善・改良は、コストをほとんどかけることなく経営の成果とされたのである。

それによって、高品質・低コストのメイド・イン・ジャパンとしてブランド化され、他の先進諸国の追従を許さない期間が30年あまり続いた。

しかし、日本的な品質管理活動には矛盾も少なくなかった。「全員参加」と「自主参加」は、本質的に矛盾する。それでも高度成長期には、国民がさらなる豊かさを求めて目的を共有化できたので、「全員参加」のスローガンもそれなりに「効果」を発揮した。80年代に入ると、人びとの欲求が次第に多様化していくなか、「全員参加」は吸引力を失い、個性と創造性の発揮が重視されるようになる。

1980年代中頃～90年代になると、日本的品質管理活動の衰退期へと転じる。限界や問題が顕在化し、QCサークルの解散など全社的な品質管理活動からの撤退が相次いだ。減量経営の下、「品質管理はマスター済み」というおごりや錯覚とも重なり、脱デミング現象など品質軽視の動きも顕著になる。

それらは、欧米でのデミング重視の動きと好対照をなしており、日米再逆転の呼び水ともなる³⁴⁾。世界がデミング・システムに邁進しだしたのち、日本の産業、社会、経済、文化、教育における競争力は相対的に低下していく。

2000年代に入ると、コスト重視・品質軽視の経営がいつそう強まる。一方での現場軽視、他方での「強い現場」への依存、いわば形を変えての無理難題の押しつけが常態化する。現場の疲弊が進むなか、倫理の低下さらには現場力の劣化が広がり、重大な品質事故や品質不正が相次いで発覚するなど、深刻な様相を呈するに至っている。

5.5 「ふだん記」(自分史) 運動にみる「働・学・研」協同の思想と実践

人はそれぞれ、「生活という、自分たちの労働着」を持っている。橋本義夫 [1968] は、「自分の生活、体験、思考などを、自分の言葉で書き、自分の文章をつくる時代に入った」として、

「ふだん記」運動を提唱した。庶民に自分の生活史を書かせよう、その主体的な意欲を引き出そうというものである³⁵⁾。

それを「自分史」として捉え直したのが、色川大吉 [1992]『自分史—その理念と試み』である³⁶⁾。橋本義夫を、「自分史のパイオニアであり、日本の庶民に自己表現の道を切り拓いた先覚者」と評した。自分史の核心は、歴史を切り結ぶその主体性にあり、自分と歴史の接点を書くことにある。人生の方向を決定づけた原体験に注目し、それを記述することによって、その時代の生きた状況を描き出す。

臥薪嘗胆の第1期(1958-67)を経て、橋本が本格的にこの運動を始めたのは、1968年からである。「ふだん記」創刊号を出し、第2期目の「ふだん記」運動³⁷⁾がスタートした年である。反公害や近代化への懐疑など「内省への転換期」にさしかかっていた。

1973年には石油危機が勃発し、経済成長最優先・資源エネルギー多消費志向の価値観がひっくり返される。「ふだん記」運動を、ようやく軌道に乗せ、その体制づくりが終わって、これから普及拡大期に入ろうとした矢先のことであった。まさに、好機到来である。

その後の数年間に、ふだん記運動は一気に十数倍の発展を見る。1975年には、活版220ページ、執筆者160人を擁する第40号を刊行する。それを基に、各人が個人文集としてまとめた「ふだん記」の本や新書も、90冊に達していた。この文章運動は、「市民権を獲得した」のである³⁸⁾。

橋本 [1968]によると、庶民の「記録は、一時の出来事を永遠なものに…余の片隅の出来事を全体のものにすることができる。…記録でもっとも値打ちがある時は、激しい変化の時である」。

記録として価値のある「激しい変化の時」とは、社会経済環境の変化の時だけでない。自らの人生における激しい変化の時(あるいは大きな転換期)も、質的には匹敵するほど大きな意味をもつとみられる。「働・学・研」協同論は、自らの人生、とくに仕事と研究における大きな転換期に光をあて、その意味を捉え直そうとするものである。

色川 [1992]によると、転換期において民衆文化は、新しいものに対する学習として始まり、やがて自己表現の段階に到達していく。これも、個人的なレベルからグループへと表現が深まり、広がっていく。

「新しいものに対する学習」から「自己表現の段階」への発展は、「働きつつ学ぶ」から「働きつつ学び研究する」への展開と軌を一にするものがあるとみられる。筆者が、「働きつつ学び研究する」活動(「働・学・研」協同)を働く者の視点から提示したのは、折しも1973年秋である。まさに石油危機が勃発した歴史的な転換期ともびったり重なる。

5.6 基礎研運動と企業社会変革運動にみる

「働・学・研」協同の理論と実践

「ふだん記」創刊号が出版された1968年は、経済学基礎理論研究所³⁹⁾(基礎経済科学研究所の前身、略称「基礎研」)が設立された年でもある。「いきいきとした現実感覚と基礎理論」のスローガンを掲げ、労働者学習の普及と発展、民主的研究者の集团的養成、経済学の創造的発展の3点を基本目的にしている。

1975年に、名称が基礎経済科学研究所(現行)に変更され、夜間通信研究科(基礎研大学院)も開設されて労働者研究者の育成に乗り出す。その後、人間発達の経済学を提唱・発展させ、労働者研究者を育ててきた。機関誌・学術誌と

しての『経済科学通信』も、149号を数えるに至っている。それらは、基礎研の独自性として注目される。

そうした基礎研運動をリードしてきた森岡孝二は、2018年8月に74歳で帰らぬ人となる。基礎研の理念や目的を自ら実践し、研究と社会活動のいずれにおいても大輪の花を咲かせた。企業社会研究の第1人者にして第1級の精力的な社会活動家であり、両面を兼ね備えた類まれな研究教育者であった。両者のダイナミックな再結合・融合化を図ってきた人であり、「働・学・研」協同の体現者に他ならない。社会活動での信頼とネットワークが調査・研究にプラスされ、また研究の成果や洞察力が社会活動にもフィードバックされ、社会活動をリードし押し上げていく。まさに、社会活動と研究の比類なき良循環を創り出した。

森岡の社会的な活動は、株主オンブズマンに始まり、ブラック企業の告発、その後とくに過労死問題の取り組みにおいて、過労死防止法の制定や過労死防止学会の立ち上げなどで大きな力を発揮する。自らNPO法人（働き方ASU-NET）を組織して理事長となるなど、社会問題と深く関わり、関係者（被害者や家族・遺族、弁護士など）とともに運動の渦中に飛び込み、問題解決に尽力してきた。「心臓に障害を抱えつつの獅子奮迅の人生」（中谷武雄）であった。

研究と社会活動の両面において、多くの関係者を惹きつけ結びつけて、大きな力に変えていったのは、彼の類まれなる人間力、すなわち「視野の広い寛容で謙虚な人柄」であり「崇高な人格」であったといえる。

6 「働・学・研」協同スタイルの創造—3次元体験をふまえて

6.1 「働・学・研」協同の試みと原型づくり

製鉄所21年、大学27年、合せて48年の勤務を終え、2019年3月に定年退職を迎えた。この間、いろいろと局面は変わるも、「働きつつ学び研究する」（すなわち「働・学・研」協同の）生き方を心がけ、自分なりのスタイルをつくり出してきた。

この間における「働・学・研」協同の試みは、次の3つの次元にみられる。第1は、製鉄所で働きつつ基礎経済科学研究所（略称、基礎研）の研究活動に参画した20～30代のチャレンジである。第2は、そうした人生スタイルを続けつつ、さらに社会人大学院（京都大学経済学研究科）に学び研究を磨いた40歳前後の頃の試みである。第3は、名古屋学院大学に転じそれまでの研究蓄積を3冊の本にまとめて出版した数年間を経て、大学院博士課程で社会人博士育成に力を注いだ20年間の試みである。

半世紀近くにわたる「働・学・研」協同の挑戦を通して、3つの原型（いわゆる「型」）もつくり出してきた。1つは、基礎研をベースとする労働者研究者モデル、2つは社会人大学院で博士論文をめざす社会人研究者モデル、3つは名古屋学院大学での博士論文指導を軸にした社会人研究者育成モデル、である。そこから、多様な社会人研究者モデルが輩出する。

浅学非才にもかかわらず、こうした原型づくりに関わることはできたのは、なぜか。まさに、それぞれの課題が社会的に浮上した時期に、遭遇できたことである。そして、（正面から課題に向き合うなか）多くの優れた先達や仲間に出会い、そうしたコミュニティで学ぶことが出来たことが大きい。その多くは、「時の利」「人の

利」「地の利」に恵まれたことに与っている。そうした中で可能となった挑戦であったといえよう。

6.2 製鉄所時代（1971-91年）における「働・学・研」協同の試み

製鉄所での現場実習と古典との出会い

大学を出て鉄鋼メーカーに入社したのは、1971年のことである。入社直後の半年余は、高炉や転炉、圧延などの各現場を実習して回った。その時の迫力ある現場の映像が、今も脳裏によみがえる。独身寮（相部屋）で6年間過ごしたが、文献の保管や時間など研究するには何かと不便を極め、細心の注意を要した。

比較的自由のあった現場実習時代には、『資本論』を読破した。文庫版にブックカバーをかけ寮管理者の目に直接触れないように気を配りつつの独学であったが、その迫力に深い感銘を受ける。製鉄所現場での実習体験が、大工業論や労働論などへの理解と共感を促してくれたのである。

製鉄所では、原料管理・生産管理の仕事にたずさわる。以来、退職にいたる21年間、この仕事に就いてきた。事務系の大卒が、技術系の部門で10-20年と同じ仕事をするには、皆無のこととみられ、筋を貫く研究活動による会社人生の厳しさを反映したものであった。独自の人生&仕事スタイルを創造してゆくしか道はなかったといえる。

製鉄所と基礎経済科学研究所を舞台にした「働・学・研」協同の試み

製鉄所で3年目を迎えた1973年春より、経済学基礎理論研究所（基礎経済科学研究所野前身）支部の大阪2部基礎研（故・森岡孝二主宰）に参加する。そこでの活発な議論に触発され、一気呵成に論文化する。同年秋に最初の論文

（「大工業理論への一考察」）を『経済科学通信』に発表し、労働者研究者として産声をあげた。民間大企業の労働者による研究論文は、基礎研でも初めてということもあり、内外から身に余る高い関心・評価をいただいた。その手応えと熱い期待が、働きつつ学ぶ現場研究に賭ける決意を促したのである。

20代の半ばから後半は、旺盛な研究活動ができ、資源論、技術論、鉄鋼産業論、理論経済など各分野の第1人者の門をたたき師事を受けるなど交流を進めた。

しかし、30代に入ると生活環境などの変化に伴い、仕事と研究の好循環を維持することが難しくなる。会社の業務、研究（夜・休日）、家庭（共稼ぎ・3児育て）がうまく回るように、試行錯誤を繰り返した。会社と研究の両面で、壁にぶち当たる。

企業内にあっては、研究活動や論文発表などを契機に会社のマークが強まる。キャリア形成の機会を奪われるなど、困難な立場に追い込まれる。「日本の鉄鋼原料分野のトップに」の夢も、頓挫を余儀なくされていく。研究面でも、産業・労働の理論と実証分析の両面で、独自性が見出しがたくなるなど、高い壁にぶつかる。会社と研究の両面での悩みは、心身の不調をもたらす。そうした負のスパイラルから脱出すべく、試行錯誤を繰り返した。今も続けているテーマ日誌は、そうした中で始めた手法である。

「働・学・研」協同の新たな展開—京大院・経済学研究科（1987-91年）に学ぶ—

製鉄所で働きながら、京大院・経済に新設（1987年）の社会人コースへ進学したのは、30歳代も終盤のことである。

恩師（池上惇）から、入学の誘いをいただいた。在野精神との葛藤もあったが、人生の転機を図るべく進学を決意する。専門・外国語試験

を突破して社会人入学を果たす。社内の上司や人事部に根回しし、なんとか了承にこぎ着ける。「休日などにやる分には構わない」とのお墨付きを得、「頑張れよ」との激励を受けるに至る。険しい空気の中、まさに「背水の陣」で臨んだ賜物といえるかもしれない。

遠隔地通学ゆえ、平日の通学は難しく、恩師には土曜・隔週に大学院ゼミ（産業論研究会）を開いていただいた。そこで活発な議論は、基礎研に参加した20代半ばの頃を彷彿させるものがあり、わが研究に大いなる刺激とヒントをもたらす。

それだけでなく、後進の社会人研究者の孵化器にもなっていくのである。産業論研究会では、当初、共通の文献を取り上げていたが、社会人の場合、それだけでは限界があることに気づく。彼らは、職場や地域など多様な体験と問題意識を有していて、それを引き出し、深めていく仕掛けが求められる。そこで、問題意識やアプローチなど自家製の作品（メモ、レジメ、論文）などを持ち寄ることを提案し、出席者のノルマとしたのである。これが、フィットする。研究会では、数本の研究報告をめぐって議論が白熱する。数年間、司会進行役を務めたが、数時間が瞬く間に過ぎるなど、制御するのも至難の業となる盛況をもたらした。

恩師の類稀なる指導、そこにわが創意工夫を融合させての独自のスタイルを編み出し、後進の方々も競うようにそれを実践されたのである。1993年の単著出版で経済学博士（社会人第1号）を授与されたが、その後、この研究会から10本ほどの博論が輩出し、社会人博士への評価が定着していくのである。

6.3 大学と社会人研究者をつなぐ「働・学・研」協同の試み

現場研究の掘り起こしと体系化の試み

1992年、名古屋学院大学経済学部にて工業経済論と技術論担当の助教授として赴任した。最初の数年間は、学部教育に携わりながら、それまで溜めていたものを一気に吐き出し論文化していく。研究と教育の好循環をめざして模索しつつ、現場研究の掘り起こしと体系化にまい進する。その甲斐あって、1993～96年の間に3冊の単著書（鉄鋼3部作）を出版することができた。

その直後の1997年、経済経営研究科（経済学および経営政策専攻の2修士課程）が発足し、1999年には経営政策後期博士課程がスタートする。

社会人大学院での博論指導（1999年～）

経営政策後期博士課程の発足（1999年）に伴い、産業組織研究（後に産業システム）研究担当として博士論文指導を行うようになる。本学博士課程では、この20年間に30名の博士が誕生する。

博士課程十名ゼミは1999年に、現役ゼミ生1人から出発する。ゼミは、産業システム研究会として、他ゼミや他大学院OB、他大学教員など博論をめざす人たちにも、広く門戸を開く。ゼミの博士OBも参加し、単著書の出版や研究の深化・発展を図るだけでなく、現役へのアドバイスや支援などにもご尽力いただいている。

産業システム研究会（十名ゼミ）では、それぞれの報告（メモ、レジメ、論文など）をたたき台にして議論する。さらに、博士論文の構想や全体像などについても、折に触れて報告を促しアドバイスする。電子メールなどでも、研究のやり方などをアドバイスし、論文（ファイル）を交流し、赤字で校正して返信するなど、きめ

細かなフォローを心がけている。

これらのフォローは、京大方式（産業論研究会）ではあまりしなかったやり方である。1980年代後半は、パソコンやインターネットが未だのワープロが主流であった。そうした歴史的な違いもさることながら、博士課程進学者の質の違いによるところも少なくない。

京大の現代産業論研究会には、意欲的な社会人研究者が集まり、梁山泊の様相を呈しつつあった。彼らは、基礎研などで研究論文を何本か発表し、2カ国の外国語による専門試験も合格している。それゆえ、問題意識や課題を持ち寄り議論するだけで、大いなる効果がみられたのである。

一方、名学大の場合、博士課程進学者の学力や研究水準は多様で、とくに留学生のバラつきが大きい。そのため、きめ細かな指導とフォローが求められる。彼らが、産業システム研究会にて研鑽を積み社会人研究者へと変身を遂げつつ、博士論文を仕上げていくプロセスは、ドラマに満ち、実に感動的である。

産業システム研究会（十名ゼミ）では、この20年間に14名（社会人研究者10名、中国人留学生4名）の博士（経営学）を送り出している。博士論文の多くは高い評価を受け、近年は単著書としての出版が相次いでいる。集団指導のシステムも、博士論文の水準を高める上で大きな力になっているとみられる。

名学大における博士論文の審査は、予備審査と本審査の2段階方式になっている。いずれも、審査委員会（4名）での指導・承認を経て、教授会での審査（無記名投票）を受ける。重要な役割を担うのが、予備審査の段階である。厳しくも的確かつ詳細にわたる注文が付けられる。それをクリアするプロセスで、博士論文はより洗練化され、本審査にかけられるのである。

産業システム研究会（十名ゼミ）では、製鉄所現場、基礎経済科学研究所、京大・社会人大学院で編み出し磨いたノウハウを、博士論文指導に活かしており、さらに独自の工夫を凝らした指導方法へと発展させている。そして集団指導のシステム、とくに博士論文の予備審査における確かつ詳細な集団指導（審査員4名）が、さらなる洗練化を引き出している。わが門をたたく者は僅かだが、ゼミに入ってきたチャレンジャーには石にかじりついても博論を仕上げるよう激励・支援してきた。

6.4 近年の博士課程離れとその背景

日本人のノーベル賞受賞が続いているが、博士人材は諸外国に比べて少なく、博士人材の層の薄さに先行きへの懸念が強まっている。日本企業におけるブレークスルーの少なさの一因ともみられる。

博士号取得者の比率は、ドイツ・英国の1/3、米国・韓国の半以下である。欧米諸国や韓国では、増加する傾向もみられる。日本は逆に低下する傾向にあり、10年間で2割のダウンがみられる（**図表4 人口100万人当たりの博士号取得者**）。近年の博士過程離れは深刻で、優秀な人材が研究職をめざさなくなっている。

そうした理由は何か。1つは、日本企業における博士人材の評価と活用の低さにあるとみられる。博士課程修了者にみる年齢の高さや専門分野へのこだわり、柔軟性の欠如などが問題とされた。博士の採用が常態化していないため、評価や処遇法が定まらず、ネガティブな面が過度に強調されてきたきらいもある。

2つは、大学など安定した研究職への道が狭まってきたことにある。政府の「ポストドク（ポストドクター）1万人計画」（1996年）以来、ポストドクは増えるも任期に限りがあるため、40

図表4 博士号取得者の推移（人口100万人当たり人）

年度	日本	米国	ドイツ	フランス	英国	中国	韓国
2006	140	183	299	164	288	25	184
2008	131	205	312	169	286	32	191
2010	131	219	319	174	320	35	213
2012	125	236	333	179	348	37	244
2014	118	253	348	177	353	38	255
2016	118	—	356	170	360	39	271

出所：日本経済新聞 2019.11.14

歳を過ぎてても安定した研究職に就けないポストクが増えている。

3つは、大学の研究職そのものへの魅力が減ってきていることにある。競争的研究費等の申請、研究・教育業績評価等に係る業務などに忙殺され、じっくり研究できなくなっている。そうした大学教員の実態を間近に見て、魅力も失せるのであろう⁴²⁾。

4つは、大学教員の研究力量や指導力がじっくりと培われず、社会の多様かつ深い課題とのギャップを広げていることにあるとみられる。社会人の研究指導にあたっては、とくに問われる点である。この点については、次章で考えてみたい。

打開策の1つとして、「卓越社会人博士プログラム」制度が提案されている。個々の大学と企業が合意・連携して卓越した学生を、企業が社員として採用し、博士過程に進学させ学位取得後、企業に復帰し職務に専念するというものである⁴³⁾。

卓越人材には専門力と創造力を、企業にはイノベーションへの布石を、大学教員へは知的刺激をもたらすというものである。研究・教育・イノベーションの好循環システム創造として注目される。

7 「働・学・研」協同の秘訣と展望—社会人と大学人への示唆

7.1 「働・学・研」協同の極意と社会人研究者への道—社会人へのメッセージ

働くこと、「働きつつ…」は、人生の基本であるはずなのに、近年それもままならない状況がみられる。社内外の諸変動、構造変化、厳しい競争、仕事不安、リストラ等にさらされ、心身の消耗も激しさを増している。

働くこと自体が懸念される昨今、「働きつつ学び研究する」ことなどとても、と感じる方も少なくなかろう。しかし、働くことは学ぶことであり、学ぶことは研究することと深くつながっている。こうした時代であるからこそ、本道を歩む気概と努力が大事になり種蒔きが欠かせないといえよう。

定型的な仕事がAIなどの機械へシフトしていくなか、新たな発想や創意工夫など創造的な働き方が求められ、そうした仕事の比重が高まっている。創造的な働き方を支えるのが、「学び」であり「研究する」という姿勢と努力である。あらゆる産業や地域で、社会人研究者が求められているのである。

しかし、社会人研究者の道を歩もうとしても、

一見ないないづくしのオンパレードである。学ぶ時間は少ない、仲間も場も見当たらない、文献・資料をどう探すが見当がつかない、金や精神的ゆとりもない。しかし、社会人研究者は自らの内に、それらのハンディキャップを克服するものを有している。それに、ほとんど気づいていないだけといえるかもしれない。

働くゆえの狭隘さというか限界も、少なくなかろう。しかし、このテーマでしか勝負できない、自らの労働体験へのこだわりといった限定性は、そこに特化せざるをえないという集中力(＝強み)に転化しうる。人間的な発達・向上欲求、自己実現欲求などは、制限され抑圧されるなかで、かえって刺激され潜在的に強まる、という面もみられる。

何よりも、働く現場は情報と経験知の宝庫といえる。生きた現場情報の膨大な渦の中にあって、五感を通して体験・入手できるという、何物にも替え難い強みがある。こうした強みを自覚し、明瞭な問題意識や視点と結びつけると、限られた時間・文献などのハンディキャップを乗り越え、ユニークで奥深い研究が可能になる。

長年の仕事体験を通して、膨大な暗黙知(個々の体験・思い・情報・知識・ノウハウなど)の塊が体内に頭脳の内に蓄積される。まさに、暗黙知の地下鉱脈という無形資産を内に秘めているのである。労働中、仕事の現場(職場、企業、産業)の中にこそ汲みつくせぬ研究の源泉があるといえよう。

社会人大学院にチャレンジする意義は、何であろうか。ここでは、次の3点をあげたい。

1つは、社会人研究者へと変身を遂げる機会となる。指導教員や仲間とのフェース・ツー・フェースの議論が、潜在的な問題意識を掘り起こし、火をつける。文献資料については、口コミやインターネットで検索し活用するなかで、

感覚やノウハウが磨かれる。学会や研究会への出席や研究発表などを通して、知的な交流や人脈を得るなど、企業、業界の枠を超えた知的ネットワークづくりが可能となる。

2つは、人生と仕事の質・創造性を高める契機になる。研究論文として、自らの仕事や企業、産業を捉え直すことにより、より広く深い視点や発想が育まれる。思いを込めた修士論文は、人生と仕事の質・創造性を高め、イノベーションの孵化器にもなりうる。また、質の高い修士論文は、博士論文の土台となり跳躍台にもなる。

3つは、博士論文への挑戦への道を切り拓くことができる。博士論文は、高度な創造性・専門性・体系性を磨き、創造的な人生と仕事を切り拓く。

修士論文と博士論文の違いは何であろうか。修士論文は、研究入門あるいはローカル版といった側面がみられる。それが博士論文になると、質的にも数段アップし、体系的かつ独創的な研究が求められる。全国版さらにはグローバル版といった色彩が濃くなる。

博士論文という高い山への挑戦と達成は、創造的な人生と仕事の画期を呼び込むことになるであろう。そうした事例を、幾つも見てきた。「そんな高い山登りなどとても…」としり込みする方も少なくなかろう。しかし、強い思いと粘りさえあれば誰でも挑戦でき、しかも適切な指導があれば、かなりの確率で完成可能といえる。3次元の体験と原型づくりを通して得た、わが確信である。

7.2 社会人研究者育成の心得と醍醐味—大学人へのメッセージ

社会人研究者のテーマは、多様かつ奥行きが深い。彼らの置かれた状況や背景を配慮しての、柔軟かつきめ細かな粘り強い指導が必要であ

る。また、原石に潜む宝石を見出す目利きの如きハイレベルの研究指導能力が求められる。

筆者の博士課程ゼミでは、次のようなやり方をとるなど工夫を凝らしている。博士論文については、テーマは何か、構成はどうあるべきか、各章のポイントはどうか、何を軸にしてどのように展開すべきか、が決め手となる。そこで、そうした点について、毎回のように報告してもらい、議論を重ねる。3年以内で首尾よく書き上げるのは、簡単ではないが、クリアする人も少なくない。書き上げた後も、さらに洗練化を図る必要がある。この過程が重要で、執筆者の構成力や表現力が磨かれる絶好の場となる。(数ヶ月～1年近くに及ぶ)洗練化を終えて、ようやく申請する。

それによって、厳しく真摯な審査にも揺るがない骨組みが固まり、結果として高水準の取得率につながるのである。しかし、万全を期しても、予備審査では厳しい指摘や注文が他の審査員から出される。それらの課題をクリアすることを通して、博士論文はさらに深化し洗練化されるのである。

こうした一連のやり方は、ゼミ発足以来、変えていない。なぜ、このようなやり方をとるのか。それは、次のような配慮によるものである。

1つは、きめ細かくフォローしないと、忙しさにふりまわされ何年経っても完成には至らないからである。また、せっかく書き上げても、構成がしっかりしていないと、異なる視点からの批判をうけると腰砕けになりかねない。

2つは、難しい入学試験で選抜されていないゆえの玉石混交といった入学時の質の問題も考えられる。

むしろ昨今では、職場環境などの厳しさが一段と増し、博論に向けて「働きつつ学び研究する」ことのハードルが高くなっている点への対

応という側面が強くなっている。

かつて象牙の塔、研究のメッカといわれた日本の大学も、様変わりしつつある。大学間競争の激化に伴って、学部教育や管理運営などの負荷が増大しており、社会人大学院が広がるなか夜間や休日の授業も増えている。大学教員の多くは、じっくりと研究に向き合う時間がとれず、充電(研究)なき放出(教育)を余儀なくされる傾向もみられる。研究のゆとりを失い、確信を持った研究や、現場研究と理論化の深い結合なども困難度を増している。研究業績主義(点数、形式)が強まるなか、テーマの個別化・狭小化など研究の保守化もみられる。

一方、社会人研究者の博論指導に本気で取り組もうとすると、自らの研究とも正面から向き合わざるを得ない。いずれも時間と根気を要するゆえ、避けるが無難とみえるかもしれない。また、本気で取り組むということは、自らの長所と社会人研究者の強みのハイブリッド化につながるなど、自らを超える研究を受け入れる度量も求められる。

上記のような困難な環境を、教員の立場からどう打開していくかが問われよう。学び合うという発想の転換がポイントになるとみられる。

現場情報と専門知識に富む社会人に対しては、「指導」という上からの目線ではなく、一緒に考え学ぶという同じ目線、いわばスタンスの転換が求められるように思われる。これまで「博論指導」あるいは「研究指導」という表現で通してきたが、「指導」というより「助言」の方がマッチしている。研究アドバイザー、研究ガイド・伴走者といえるかもしれない。

社会人研究者の多彩な現場経験と目を通して、多様な現場を追体験し、一緒に学び研究する。そのような得難い機会を得ることができるのである。大学という教育現場、そして机上の

研究を越えて、現場の最前線の息吹に触れつつ共に学び研究することができる。まさに、宝石の如き時空といえるかもしれない。博論指導の醍醐味も、そうした中に潜んでいるといえよう。

博士論文指導、博士号の授与が、大学にとって持つ意義もそこにある。現場と大学のつながりを深め、相互の活性化を通して、現場のイノベーションを促し、大学の品格を高める。「働・学・研」協同は、そのような好循環をうみだす力になるであろう。

7.3 「働・学・研」協同の魅力と21世紀モデル

「働・学・研」協同の思想と実践の伝統

日本には「働・学・研」協同の思想と実践の伝統が脈打っているが、その元祖とみられるのが二宮尊徳である。

江戸後期の篤農家で報徳思想を提唱した二宮尊徳は、土から萌え出た（土着かつ）独立の思想家であった。職業としての学者のみちに程遠い生活にあって、その鋭い自然観察と実務家が持つ徹底的な合理主義によって、新しい道を切り開いてきた。立派な農民として成長することが、思想家・尊徳の誕生を可能にしたのである。彼の自然や歴史を見る目は、弁証法的かつ発展的であった。彼の仕方は、自らの経験に基づくものであるが、単なる現場の経験主義にとどまらず、それを裏づける独自の哲学があり、歴史的科学的な調査があった。その実行にあたっての計画は精密に組み立てられていたのである⁴⁰⁾。

生きる哲学、平凡な道徳の提唱・実践とその伝播力、人倫に適う経営革新によって、605村の復興、数千・数万町歩の開墾を行うなど、尊徳はスケールの大きな実業家であり、静かなる革命家でもあった。

そうした思想と実践を生み出した根底には、古典（『大学』など）を肌身離さず野良仕事に明け暮れる青年期の金次郎像⁴¹⁾、さらに生涯を通しての「働きつつ学び研究する」スタイルの徹底した実践と積み重ねがある。

この19世紀日本の卓越したモデルは、まさに「働・学・研」融合の21世紀モデルでもある。人生の質的変革を担う社会人研究者像の先駆け、みなすことができるのではなからうか。

「働・学」協同から「働・学・研」協同への歴史的流れ

「働きつつ学ぶ」から「働きつつ学ぶ研究する」へ、すなわち「働・学」協同から「働・学・研」協同へのシフトは、歴史的・文化的な流れとみることができる。

明治（前期）の自由民権時代には、学習結社や民権結社など千を越える学習グループが生まれた。それから40年後の大正デモクラシーの時代（1910～20年代）には自由大学、市民大学のようなものが生まれた。庶民の学習運動が高まるのは、時代の転換期においてである。新しいものに対する学習から始まり、やがて自己表現の段階へと進んでいく。それも、個人的なレベルからグループへと広がり深まっていくのである⁴²⁾。

1950～70年代に高揚した品質管理運動も、経営者をはじめ管理者、技術者、現場作業員まで含む幅広い労働者層を巻き込む学習運動としての側面を有していたとみられる。経営主導ではあるが、アメリカ発の品質管理手法、デミングの組織論などに学び、職場の小集団活動と結びつけ改善活動として展開される。品質管理運動は、1960年代にものづくり大企業を中心に広がり、70年代には石油危機後に経営の危機バネが働いて熱を帯びるとともに、他産業や中小企業などにも広がっていった。

一方、藤本義夫を中心に始まった庶民主導の「ふだん記」運動も、よく似た経緯が見られる。臥薪嘗胆の第1期（1958-67）を経て1968年、本格的に再スタートする、内省への転換期にさしかかり活動の体制整備も進むなか、石油危機が勃発する。それに伴う価値転換を機に、「ふだん記」運動は一気に広がっていくのである。**基礎経済科学研究所にみる「働・学・研」協同の試みとその先駆**

これら両運動と似た経緯が見られるのが、基礎経済科学研究所の「働きつつ学ぶ」運動である。1968年に、「労働者とともに労働者のための経済学を創造しよう」というスローガンを掲げて設立される。1970年代には「働きつつ学ぶ権利」の拡大を掲げ、労働者の参画する研究活動が広がっていく。

1973年秋、石油危機が勃発するなか、わが最初の論文と随筆が『経済科学通信』に掲載された。論文「大工業理論への一考察（上）」は、「働・学・研」協同のわがライフスタイルの起点となり、基礎経済科学研究所にとっても労働者の研究論文の第1号となる。随筆「働きつつ学び研究することの意義と展望」は、「働きつつ学ぶ」という基礎研の理念へと昇華される。石油危機に連動した「原料炭危機」は、日本鉄鋼業を震撼させ「炭上の楼閣」と揶揄される。その本質を分析し政策を提示したのが、十名[1974-5]「日本鉄鋼業における原料炭危機と今後の動向（上・中・下）」である。わが鉄鋼産業研究の嚆矢となった。石油危機は、筆者にとっても画期をなす出来事であった。

「働・学・研」協同のわが半世紀は、その理念を支えにして自らのモデルを創り出し、学生さらには社会人研究者の育成を通して、その理論と産業・企業研究を深め広げていくプロセスでもあった。

「働・学・研」協同のダイナミズムと社会人研究者像

働き方、働きがい、そして仕事の創造性が、かつてなく問われている。「働・学・研」協同は、そうした課題と向き合い質的に応えようとするものである。そうした課題を担うのが社会人研究者に他ならない。

働きながら苦しみや喜びを直視し、その原因を科学的に解明して、自分の独自の生き方につなげる。現場に根ざした社会人研究者としてのそうした生き方が、自らの潜在能力を引き出し続ける。少ない時間を活かして研究する職人技も身につけていく。

社会人研究者の「経験知」は、創造性の土壌である。すなわち、職場や生活の場における固有の文化に根ざしたその人なりの「人生の創り方」、つまり生活文化が自覚されてくるからである。彼らの多くは、職業上の経験知を基礎にして、専門領域の研究を行う。

それらの経験知は、本人にとって「かけがえない」知であるが、そのままでは「本人にしか分からない」知でもある。その知には、企業や地域に独自の仕事の仕方や生活慣習なども反映されている。社会人大学院や基礎経済科学研究所での研究交流が、こうした自らの経験知に分け入り客観化することを促し、「かけがえのなさ」の自覚をもたらす。それを研究対象として深めていくと、従来とは異なる新たな視点からの研究が可能となる。

各自の人生履歴の独自性から出てくる「構想力」を駆使し、地域や企業の文化を「内部化」するのである。自らの人生設計における構想に基づき、自らの仕事や生活をどのように評価し再構成すべきかを考える。構想力は、個人レベルのみならず、組織や地域レベルのものもあり、それらが個人の構想力をベースにして融合する

なかで活かされ発展する。

産業で働く人々は、例外なく企業文化の影響を受けており、それを暗黙知として先人から継承しつつ、現場で新たな知識や技術と照合して新たな習慣や伝統を創り出す。それは、「人に体化された文化資本」に他ならない。その存在に気づくことができれば、産業研究や地域における生活研究は、習慣や伝統をふまえた独自の視野からアプローチできるようになる。自らの暗黙知を自覚し、産業や地域の文化的価値や伝統をふまえた独自の構想も生まれてくる。

1990年代以降にみる社会人大学院の広がり、多くの社会人研究者を生み出してきた。とりわけ多彩な社会人博士の輩出が産業や地域さらには大学にもたらすインパクトは、質的に極めて大きなものがある。「働・学・研」協同の多様なモデルが、全国各地に生み出されているとみられる。

しかしながら、近年は「6.4 近年の博士課程離れとその背景」に示すように、博士号取得者の減少など逆行する傾向もみられる。工学系などの自然科学分野にとどまらず、人文・社会科学分野でも出てきている。

「働・学・研」協同の理念と実践は、活路を切り拓き難局を乗り越えていく知恵と力を与えてくれるに違いない。小論も、その1つとして提示したものである。

8 おわりに

定年退職が促す半世紀の総括と検証

小論は、半世紀に及ぶわが仕事・研究人生を総括し、「働・学・研」協同の理論と政策を問い直し検証したものである。退職記念号という節目が、それを促した。これまで公刊してきた幾つかの論稿も、現在地点から見直して一部織

り込んでいる。

なお、退職記念号の柱として企画したのが、「特集：「働・学・研」協同の仕事・研究・人生」である。このテーマに基づく作品17本が寄稿された。興味深い力作ばかりで、それを3部構成で編集した。小論も、第3部に（総括編として）位置する。

名古屋学院大学大学院の博士課程十名ゼミ（1999～2019年）という小舞台を通して、「働・学・研」融合の理論と実践、その多様な実像が浮かび上がる。そこには、「働・学・研」協同の21世紀モデルが垣間見られる。

製鉄所時代（1971～92年）の「働・学・研」協同から、社会人博士育成（1999～）の「働・学・研」協同へシフトする。両者はどうつながり、何が異なるのか。それへの洞察が、小論を通してより明確にできたのではと感じている。

製鉄所時代は、会社の仕事とアフターファイブの鉄鋼産業研究、両者の両立、いわば自らの「自己実現」を懸命にめざした。大学に転じ、社会人博士の育成を通して「他者実現」を後押しする大学教員時代へと、舞台は大きく転回する。しかし、ベースとなり羅針盤となったのは、前者（すなわち製鉄所時代の仕事・研究を通じた交流体験）である。

この2つの舞台をつないだのが、1990年代半ばの数年間であった。3冊の単著書に仕上げて出版することにより、製鉄所時代における「自己実現」の試みを有形化する時空間に転化できたからである。それによって、社会人博士の育成による「他者実現」へ歩みも可能になったといえよう。

時・人・地の利が紡ぎ出す「働・学・研」協同の奇跡と軌跡

「働・学・研」協同の理念を提示した随筆と1本目の論文が公刊されたのは、1973年のこと

である。入社3年目、革新運動が高揚し石油危機が勃発するなど社会経済と人生の転換期であり、その息吹（時の利）に後押しされたものといえる。

大阪2部基礎研（大阪）を起点に、基礎研（京都）、産業学会、日本鉄鋼協会、社会人大学院（京大）へと活動を広げていく。製鉄所に勤務しながら参加できる距離内にあったこと（地の利）も幸いした。基礎研運動を通じて恩師や多くの大学人と交流でき、また産業・企業・技術など各分野の第一人者の知遇を得るなど、人の利に恵まれた。

名古屋学院大学に赴任して数年の内に、鉄鋼3部作を出版する。その直後に、社会人大学院が都心に開設され、博論指導がスタートした。まさに時の利（そして地の利）といえよう。

この20年間、博士課程の十名ゼミには挑戦者（現役院生など）が絶えなかった。熱心な指導教員仲間にも恵まれるなど、人の利も有り難かった。

「働・学・研」協同を掲げ、半世紀にわたり試みてこられたのは、時の利・人の利・地の利のおかげであり感謝に堪えない。

「働・学・研」協同の半世紀をふり返ると、自らの3次元体験のみならず、それを活かす舞台にも恵まれたことが大きい。学部でも、大学院においても。

博論指導を通して学んだことは、格別に深いものがある。社会人研究者の多様な思いや実践モデルにも触れ共有することができた。珠玉の如き時空間であったといえる。学部生との交流も、それに劣らぬ得難いものであった。

図表3（「働・学・研」協同の仕事・研究・教育ダイナミズム）にみるように、現場体験（製鉄所21年）をベースに、研究、学部教育、博論指導の4分野が相互に交差しフィードバック

し合いながら循環するという関係を何とか創り出すことができた。「生き方には、奇跡はどこにもないという生き方と、すべてが奇跡だという生き方がある」（アインシュタイン）⁴⁰。凡庸なるも全力傾注のわが半世紀（軌跡）においても、様々な体験・出会い・挑戦があり、それらを通して、小さな奇跡を生み出すことができたと感じている。

本特集および小論は、社会人研究者17人の奏でる多様な音色（いわば数々の軌跡と奇跡）、その交響楽を通して、社会人に対する博論指導の意義、社会人研究者の魅力と可能性、課題を、「働・学・研」協同の視点から問い直し深めようとしたものである。

注

- 1) 2019年度は、ワンポイント・リリーフ（特任教授）として、十名ゼミに所属の留学生2人（博士課程3年次）への博士論文指導にたずさわっている。
- 2) 十名直喜 [1973]「働きつつ学び研究することの意義と展望」『経済科学通信』第7号。大手高炉メーカーの厳しい労務管理を鑑み、無署名で掲載された。
- 3) 十名直喜 [1997]『働き学ぶロマン』（「自分史文学賞」応募）
- 4) 1984年（36歳）：基礎経済科学研究所15周年懸賞論文に佳作（入賞なし）
1988年（40歳）：NEC創立90周年記念論文に入賞
1990年（42歳）：第4回ジェック「ま・な・び・す・と大賞」に入賞
- 5) 「自己実現」とは、自己に内在する可能性を最大限に開発し実現して生きることである。アブラハム・マズローは、欲求5段階説において自己実現欲求を最上位に位置づけた。自己実現欲求は、成長、自己表現、能力発揮、可能性の実現、

- 使命達成といった欲求である。自己実現欲求が成長動機に基づくのに対し、下位4つの欲求（生理、安定、連帯、自尊）は欠乏動機に発するとみている（宮田矢八郎 [2004]『理念が独自性を生む』ダイヤモンド社—卓越企業をつくる7つの原則）。
- 6) 河合隼雄・中沢新一 [1998]『現代日本文化論1 私とは何か』岩波書店。
- 7) 杉村芳美 [1997]『「良い仕事」の思想—新しい仕事倫理のために』中公新書。
- 8) 十名直喜 [2012]『ひと・まち・ものづくりの経済学—現代産業論への視座』法律文化社。第10章“働きつつ学ぶ”現場研究のダイナミズムと秘訣—「働・学・研」融合の3次元体験と原型づくりを通して、第11章「働・学・研」融合の経験知と新地平—“働きつつ学ぶ現場研究”シンポジウムの総括と課題。
- 9) 十名直喜 [2017]『現代産業論—ものづくりを活かす企業・社会・地域』水曜社。
- 10) 十名直喜 [2019]『企業不祥事と日本の経営—品質と働き方のダイナミズム』晃洋書房。
- 11) 十名直喜編 [2010]「“働きつつ学ぶ”現場研究のダイナミズムと秘訣（上）（下）」『経済科学通信』122, 123号。
- 12) 十名直喜 [2016]「「働きつつ学ぶ」理念と活動の21世紀の視座」、同「持続可能な循環型産業・地域システムづくりへの歴史的視座」『経済科学通信』141号。
- 13) 「鉄鋼3部作」とは、鉄鋼メーカーから大学に転じて数年のうちにまとめて出版した、下記の3冊の単著書を指す。
 十名直喜 [1993]「日本型フレキシビリティの構造—企業社会と高密度労働システム」法律文化社。
 十名直喜 [1996.4]『日本型鉄鋼システム—危機のメカニズムと変革への視座』同文館。
 十名直喜 [1996.9]『鉄鋼生産システム—資源、技術、技能の日本型諸相』同文館。
- 14) 「無念」という表現は、41歳の「自己申告書」（上司&人事部に提出）にもみられる。「無念さをバネにして、将来は必ず日本の第1人者になり、こうした社内評価が必ずしも妥当でないことを証明する」と大見えを切っている。抑制の効いた深い思いと将来への抱負が、「無念」に込められている。
- 15) ダートウズス, M. L. 他 [1989]『Made in America—アメリカ再生のための日米欧産業比較』依田直也訳, 草思社, 1990年 (Michael L. Dertouzos et al [1989] Made in America, Massachusetts Institute of Technology)
- 16) 武田晴人 [2008]『仕事と日本人』ちくま新書。
- 17) 武田晴人 [2008], 前掲書。
- 18) 福田定良 [1978]『仕事の哲学』平凡社。
- 19) 鷲田清一 [1996]『だれのための仕事』岩波書店。
- 20) 鷲田清一 [1996], 前掲書。
- 21) 杉村芳美 [1997]『「良い仕事」の思想』中公新書。
- 22) 長山靖生 [2009]『『論語』でまともな親になる—世渡りよりも人の道』光文社新書。
- 23) 梅原猛 [2002]『学問のすすめ（改定）』竣成出版会。
- 24) 広中平祐 [2002]『学問の発見（改定版）』竣成出版会。
- 25) 外山滋比古 [1986]『思考の整理学』ちくま新書。
- 26) モリス, W. [1877]“The Decorative Arts”（「装飾芸術」内藤史郎訳『民衆のための芸術教育』明治図書出版, 1971年）。
- 27) 今井むつみ [2016]『学びとは何か—探求人>となるために』岩波新書。
- 28) 外山滋比古 [1986], 前掲書。
- 29) 石川英輔 [2008]『江戸時代はエコ時代』講談社。
- 30) 市川寛明・石山秀和 [2006]『図説 江戸の学び』河出書房新社。
- 31) 市川寛明・石山秀和 [2006], 前掲書。
- 32) 小島寅雄 [1997]『教えることは教わること』求龍堂。
- 33) 杉村芳美 [1997]『「良い仕事」の思想』中央公論社。
- 34) 斎藤孝 [2007]『なぜ日本人は学ばなくなったのか』講談社。
- 35) スティグリッツ, J.E./グリーンウォルド, B.C [2015]『スティグリッツのラーニング・ソサイエティー—生産性を上昇させる社会』薮下史朗監

- 訳・岩本千晴訳, 東洋経済新報社, 2017年 (Creating A Learning Society, Reader's Edition by Joseph.E.Stiglitz and Bruce C.Greenwald)。
- 36) 武田修三郎 [2002] 『デミングの組織論—「関係知」時代の幕開け』東洋経済新報社。
- 37) 橋本義夫 [1968] 『だれもが書ける文章—「自分史」のすすめ』講談社新書。
- 38) 色川大吉 [1992] 『自分史—その理念と試み』講談社現代新書。
- 39) 「ふだん記前期」にあたるのが、「ふだん記の会」趣意書が書かれた1958年から68年までである。この第1次ふだん記運動は失敗に終わる。高度経済成長の真っただ中であって、見向きもされなかったのである。「多摩川婦人文集—10周年記念」(1967年11月)をまとめたのを機に、やめようとした。そこに、新人の四宮さつきが「やらせて下さい」と名乗り出たのである(色川大吉 [1992])。
- 40) 色川大吉 [1992], 前掲書。
- 41) 経済学基礎理論研究所の母体となった基礎理論研究会は1965年、労働者の学習組織である京都労働者学習協議会の京大支部として発足し、労働者と知識人の共同学習会を組織するところから出発した(森岡孝二 [1973.1]「今日の経済学教育の課題」『経済科学通信』No.4)。
- 42) 有川節夫「博士進学増やす制度提案」日本経済新聞, 2019.11.4。
- 43) 有川節夫, 同上。
- 44) 奈良本辰也 [1973]「二宮尊徳の人と思想」奈良本辰也・中井信彦校註『日本思想体系52 二宮尊徳・大原幽学』岩波書店。
- 45) 前田英樹 [2009]『独学の精神』筑摩書房。
- 46) 色川大吉 [1992] 『自分史—その理念と試み』講談社。
- 47) アインシュタイン (弓場隆訳) [2015] 『アインシュタインの言葉—エッセンシャル版』藤田浩芳・大山聡子編集, (株)ディスカヴァー・トゥエンティワン。

参考文献一覧

- アインシュタイン (弓場隆訳) [2015] 『アインシュタインの言葉—エッセンシャル版』藤田浩芳・大山聡子編集, (株)ディスカヴァー・トゥエンティワン。
- 石川英輔 [2008] 『江戸時代はエコ時代』講談社。
- 市川寛明・石山秀和 [2006] 『図説 江戸の学び』河出書房新社。
- 今井むつみ [2016] 『学びとは何か—<探求人>となるために』岩波新書。
- 色川大吉 [1992] 『自分史—その理念と試み』講談社。
- 梅原猛 [2002] 『学問のすすめ (改定)』竣成出版会。
- 小島寅雄 [1997] 『教えることは教わること』求龍堂。
- 斎藤孝 [2007] 『なぜ日本人は学ばなくなったのか』講談社。
- 杉村芳美 [1997] 『「良い仕事」の思想』中公新書。
- スティグリッツ, J.E./グリーンウォルド, B.C [2015] 『スティグリッツのラーニング・ソサイエティー生産性を上昇させる社会』藪下史朗監訳・岩本千晴訳, 東洋経済新報社, 2017年 (Creating A Learning Society, Reader's Edition by Joseph. E.Stiglitz and Bruce C.Greenwald)。
- ダートウズス, M.L.他 [1989] 『Made in America—アメリカ再生のための日米欧産業比較』依田直也 訳, 草思社, 1990年 (Michael L. Dertouzos et al [1989] Made in America, Massachusetts Institute of Technology)
- 武田修三郎 [2002] 『デミングの組織論—「関係知」時代の幕開け』東洋経済新報社。
- 武田晴人 [2008] 『仕事と日本人』ちくま新書。
- 十名直喜 [1973] 「働きつつ学び研究することの意義と展望」『経済科学通信』第7号。大手高炉メーカーの厳しい労務管理を鑑み、無署名で掲載された。
- 十名直喜 [1993] 「日本型フレキシビリティの構造—企業社会と高密度労働システム」法律文化社。
- 十名直喜 [1996.4] 『日本型鉄鋼システム—危機のメカニズムと変革への視座』同文館
- 十名直喜 [1996.9] 『鉄鋼生産システム—資源, 技術,

- 技能の日本型諸相』同文館
- 十名直喜 [1997] 『働き学ぶロマン』(「自分史文学賞」応募)
- 十名直喜 [2016] 「「働きつつ学ぶ」理念と活動の21世紀的視座」, 同「持続可能な循環型産業・地域システムづくりへの歴史的視座」『経済科学通信』141号。
- 十名直喜 [2012] 『ひと・まち・ものづくりの経済学—現代産業論への視座』法律文化社。第10章“働きつつ学ぶ”現場研究のダイナミズムと秘訣—「働・学・研」融合の3次元体験と原型づくりを通して, 第11章「働・学・研」融合の経験知と新地平—“働きつつ学ぶ現場研究”シンポジウムの総括と課題。
- 十名直喜 [2016] 「「働きつつ学ぶ」理念と活動の21世紀的視座」『経済科学通信』141号。
- 十名直喜 [2016] 「持続可能な循環型産業・地域システムづくりへの歴史的視座」『経済科学通信』141号。
- 十名直喜 [2017] 『現代産業論—ものづくりを活かす企業・社会・地域』水曜社。
- 十名直喜 [2019] 『企業不祥事と日本の経営—品質と働き方のダイナミズム』晃洋書房。
- 外山滋比古 [1986] 『思考の整理学』ちくま新書。
- 長山靖生 [2009] 『『論語』でまともな親になる—世渡りよりも人の道』光文社新書。
- 奈良本辰也 [1973] 「二宮尊徳の人と思想」奈良本辰也・中井信彦校註『日本思想体系52 二宮尊徳・大原幽学』岩波書店。
- 橋本義夫 [1968] 『だれもが書ける文章—「自分史」のすすめ』講談社新書。
- 広中平祐 [2002] 『学問の発見(改定版)』竣成出版会。
- 福田定良 [1978] 『仕事の哲学』平凡社。
- 前田英樹 [2009] 『独学の精神』筑摩書房。
- 宮田矢八郎 [2004] 『理念が独自性を生む—卓越企業をつくる7つの原則』ダイヤモンド社。
- 森岡先生追悼の集い実行委員会 [2019.2] 『森岡孝二の描いた未来—私たちはなにを引き継ぐか』。
- モリス.W. [1877] “The Decorative Arts” (「装飾芸術」内藤史郎訳『民衆のための芸術教育』明治図書出版, 1971年)。
- 鷺田清一 [1996] 『だれのための仕事』岩波書店。
- 鷺田清一 [1996] 『だれのための仕事』岩波書店。
- 動の21世紀的視座」, 同「持続可能な循環型産業・地域システムづくりへの歴史的視座」『経済科学通信』141号。
- 十名直喜 [2012] 『ひと・まち・ものづくりの経済学—現代産業論への視座』法律文化社。第10章“働きつつ学ぶ”現場研究のダイナミズムと秘訣—「働・学・研」融合の3次元体験と原型づくりを通して, 第11章「働・学・研」融合の経験知と
- 新地平—“働きつつ学ぶ現場研究”シンポジウムの総括と課題。
- 十名直喜 [2016] 「「働きつつ学ぶ」理念と活動の21世紀的視座」『経済科学通信』141号。
- 十名直喜 [2016] 「持続可能な循環型産業・地域システムづくりへの歴史的視座」『経済科学通信』141号。
- 十名直喜 [2017] 『現代産業論—ものづくりを活かす企業・社会・地域』水曜社。
- 十名直喜 [2019] 『企業不祥事と日本の経営—品質と働き方のダイナミズム』晃洋書房。
- 外山滋比古 [1986] 『思考の整理学』ちくま新書。
- 長山靖生 [2009] 『『論語』でまともな親になる—世渡りよりも人の道』光文社新書。
- 奈良本辰也 [1973] 「二宮尊徳の人と思想」奈良本辰也・中井信彦校註『日本思想体系52 二宮尊徳・大原幽学』岩波書店。
- 橋本義夫 [1968] 『だれもが書ける文章—「自分史」のすすめ』講談社新書。
- 広中平祐 [2002] 『学問の発見(改定版)』竣成出版会。
- 福田定良 [1978] 『仕事の哲学』平凡社。
- 前田英樹 [2009] 『独学の精神』筑摩書房。
- 宮田矢八郎 [2004] 『理念が独自性を生む—卓越企業をつくる7つの原則』ダイヤモンド社。
- 森岡先生追悼の集い実行委員会 [2019.2] 『森岡孝二の描いた未来—私たちはなにを引き継ぐか』。
- モリス.W. [1877] “The Decorative Arts” (「装飾芸術」内藤史郎訳『民衆のための芸術教育』明治図書出版, 1971年)。
- 鷺田清一 [1996] 『だれのための仕事』岩波書店。